

浅野誠

自然

2016～2023年

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」<https://makoto2.ti-da.net/>のなかの「自然」カテゴリーの2016年から2023年までの記事を編集し、多少の加筆をしたものが、本冊子だ。

沖縄南城にある我が家は、森の中に位置し豊かな自然に恵まれている。そこで私たちが日々出会うもの・ことには話題が多い。読者の皆さんが、それに加わってくださることを望む。

2023年8月

著者

目次

※ 項目のはじめの年月日は、ブログ掲載日

自然の中の私たち（32回連載）

6

- 2022年09月27日 1. 我が家周辺の自然
- 2022年10月03日 2. 我が敷地の歴史
- 2022年10月09日 3. 「自然状態」のなかに建物をつくる
- 2022年10月15日 4. 我が敷地の大木たち
- 2022年10月21日 5. 中低木たち マッコウなど
- 2022年10月27日 6. 日照を好む植物（1） 果樹 花木
- 2022年11月02日 7. 日照を好む植物（2） ツル性植物など リュウゼツラン 月桂樹
- 2022年11月08日 8. 日照を好む植物（3） 花々
- 2022年11月14日 9. ハーブ 日照を好む植物（4） 花々
- 2022年11月20日 10. 観葉植物 半日陰・日陰を好む植物
- 2022年11月26日 11. シェフレラ アグラオネマ 月桃（サンニン） ハンギングヘリクニア
レッドジンジャー
- 2022年12月02日 12. オオタニワタリ 地面近くの植物
- 2022年12月08日 13. タマリユウ グランドカバー
- 2022年12月14日 14. 酸性土を好む植物は苦難の道を歩む
- 2022年12月20日 15. 自生の植物たち
- 2022年12月25日 16. 自生種と外来種
- 2022年12月31日 17. 外来種が圧倒している 庭の動物の生存競争 カラスとツミ
- 2023年01月06日 18. 鳥
- 2023年01月11日 19. 海亀とモグラ
- 2023年01月16日 20. ヘビ類 ツミの写真
- 2023年01月22日 21. 動物の減少
- 2023年01月28日 22. トカゲ トンボ カタツムリ アオミオカタニシ
- 2023年02月03日 23. バッタ オオジョロウグモ カマキリ ナナフシ セミ カミキリムシ
ホタル
- 2023年02月09日 24. 蚊 蠅 アリ ごきぶり やすで おおむかで
- 2023年02月15日 25. ミミズ アーマン（殻争奪戦） モグラ カニ
- 2023年02月21日 26. マダラチョウ科の蝶 オオゴマダラ カバマダラ
リュウキュウアサギマダラ ツمامラサキマダラ

- 2023年02月27日 27. アゲハチョウ科 シロオビアゲハ アオスジアゲハ
2023年03月05日 28. シロチョウ科 キチョウ ツマベニチョウ
タテハチョウ科 リュウキュウミスジ イシガケチョウ
2023年03月11日 29. 屋内の動物 アリ ヤモリ クモ
2023年03月17日 30. 処分して、今はないもの1 ガジマル 金煌マンゴー
2023年03月23日 31. 処分して、今はないもの2 ユーカリ クルチ数本 ビワ
ミフクラシギ 芝生
2023年03月29日 32. 殖しているもの

自然と人間、そして私 (30回連載)

38

- 2019年01月03日 1. 自然のなかの人間 日常出会う動物
2019年01月10日 2. 動物を「分類」する ベット 犬猫
2019年01月17日 3. 共存する動物 鳥 蝶
2019年01月24日 4. (続) 共存する動物 クモ ヤモリ
2019年01月31日 5. 有害有益の二分論を過剰にはしない 消えた動物 マングース アカマタ
2019年02月08日 6. 現われた動物 カラス トンボ ハブ
2019年02月14日 7. いっしょに棲む動物
2019年02月21日 8. 自然と人間との共同制作としての庭
2019年02月28日 9. 果物育て1 在来種 酸性土
2019年03月07日 10. 果物育て2 マンゴー 日当たり 剪定
2019年03月14日 11. 授粉 苦戦話 果物育て3
2019年03月21日 12. 亜熱帯雨林の我が敷地内外の樹木
2019年03月28日 13. 我が敷地内の大きな樹木
2019年04月04日 14. わが庭畑の「中くらい」の大きさの樹木
2019年04月11日 15. わが庭畑の将来大きくなりそうな木、そして低木
2019年04月18日 16. オオゴマダラの交尾 わが庭畑の背の高い草
2019年04月25日 17. ヤリノホクリハラン クワズイモ オオタニワタリ
オオアブラガヤ 木陰に育つ自生の植物
2019年05月02日 18. 季節変わりの風と水 景観 海とイノー
2019年05月09日 19. 景観 海岸 畑
2019年05月16日 20. 景観 道 川
2019年05月24日 21. 景観 森 建物
2019年06月01日 22. 自然の動き・変化を感じ取る
「自然の征服」ではなく「自然の一環」としての人間
2019年06月08日 23. 気候変化の実体験 乾燥と湿気

- 2019年06月14日 24. 海の色 日の出・日の入り
2019年06月20日 25. 星 遠くに見える・聞こえる人
2019年06月26日 26. 静けさのなかで聞こえるもの
2019年07月02日 27. 感じ取れるかどうか、微妙なもの
2019年07月08日 28. 陰暦と生活 昼と夜の時間 季節感覚
2019年07月16日 29. 災害と恵み
2019年07月23日 30. 人間と自然との関係と、自然観

2017～2022年 連載外の自然

72

- 2017年06月15日 トンボ ヤゴ
2017年06月26日 梅雨明け 自然の中に真夏の到来を感じる
2017年07月01日 パッションフルーツ豊作 ぎぼうし ディフェンバキア
こうもり いそひよどりの巣
2017年07月28日 ナガサキアゲハ
2017年08月04日 トンボのオスメスと産卵 ナガサキアゲハ
2017年10月10日 ツミ？
2017年10月20日 オオゴマダラの来訪 繁殖への期待
2017年11月14日 池のメダカのほとんどが死んでしまった 原因不明
2017年12月24日 我が家を訪問する鳥たち 寒さのためか動き活発 鳩
いそひよどり めじろ こうもり つみ
2018年06月06日 メダカを飼っている池に現れる動物 今度は大きな蟹
2018年06月29日 グッピー大繁殖 もらい手探し中
2018年07月05日 台風と大雨続き
2018年07月19日 オオゴマダラがつがいであられる
2018年09月08日 オオジョロウグモ メスとオス
2018年10月07日 台風 長期停電 インターネット長期切断
2018年11月08日 池でグッピーを育てる
2019年03月04日 オオゴマダラの幼虫 季節は変わる
2019年07月18日 台風の高波 サンセベリア（トラノオラン）を室内に置く
2019年09月02日 ツマムラサキマダラ 蝶が飛び交う庭畑
2020年05月04日 ウラナミシジミの交尾
2020年07月23日 オオジョロウグモ オスとメス
2020年08月10日 西之島火山による煙霧（PM2.5）！
2020年09月01日 台風 これから片付けが大変だ
2020年09月04日 台風の変化

自然 2016～2023年

2021年08月19日 楽しいドラマのような雲

2021年09月21日 早朝 月は西に 日は東に

2021年10月21日 小笠原の海底火山からの軽石が中山・玉城海岸に漂着

2022年05月04日 ジャコウアゲハ イシガケチョウ アオタテハモドキ

2022年06月09日 ハブ取り網にアカマタがかかる 2回目

2022年06月17日 フタオチョウ？

2022年06月27日 豪雨と梅雨明け ウミガメとハブの受難

2022年07月27日 オオゴマダラの交尾

2022年09月07日 台風

自然の中の私たち（32回連載）

2022年09月27日

1. 我が家周辺の自然

私たち（誠・恵美子 猫の虹・雨）と私たちが住む家・庭は、ほぼ森に囲まれている。我が家から外を見れば、3階4階からは、海岸・空と散在する集落の家々が見える。1階2階からは、庭と隣の森が見える。外、たとえば中山公民館や海岸から見ると、我が家は森に囲まれ、森に浮かんでいるように見える。だから、私たちの日々の暮らしは「自然のなかにある」といってもよいだろう。

そこで、「自然の中の私たち」の風景を連載していこうと思う。

この地域で農業が盛んになる1000年以上前には、このあたり一帯は森で、イノーでの魚介類採取や、森での小動物や植物採取を中心にする人々が生活していただろう。ジュゴンも取っていたと言われる。1～2キロ近く離れたところで発掘された貝塚跡などから、そうした遺物が見つかっている。また、海外交易に使われた水路といわれる個所もある。その一つが、ヤハラヅカサといわれるアマミキヨ到来地である。

西の数キロ離れた所には、港川原人で有名な港川遺跡、そして近年新しい考古学発見が相次ぐガンガラーの谷などがある。

玉城王の拠点と伝えられ、14世紀建造と推理されるタマグスク（我が家から真北にあたる。直線距離にして2キロもないだろう）は、中山と隣字の玉城の上方で、海拔180mにある。そこに関わる人が、周辺集落とつながりがあるとの言い伝えがあるが、文献史料としてははっきりしない。

中山集落にも、先祖に関する言い伝え・昔ばなしは多いが、確たる事実とすることは難しい。

我が家から数百mも離れていない海岸線は、かつてはずっと近かったかもしれない。我が敷地の標高は20～30mほど。ガマは、もう少し丘を上った所から点在し始める。集落は、現在標高10～60mぐらいのところ立地しているが、戦前までは30～100mほどの所にあった。我が家から上は、少しは平らで、住宅が以前から建てられていたが、我が家あたりからは、ここ20～30年の間に、住宅が建ち始めた。戦前からの住宅地あたりから上部にはガマが多くあり、沖縄戦中には、住民が避難していた。

そのあたりの多くは、自然林になっている。戦争、とくに艦砲射撃で焼けたあとから、自然が復活してきただろうから、ほぼ77年余の亜熱帯林ということになるだろうか。字百名あたりから字富里・屋嘉部あたりまでつらなる丘の中腹の自然林の一部はなぜか「やんばる山」と呼ばれている。その一角



はグスクロード公園になっているが、地番は中山が多い。また、門中墓が点在している。海をよく見わたせるからだろうか。

ガマあたりは、字共同作業で入ったことがあるが、ガジュマルの巨木が

生い茂っていた。また、字百名と字中山のテレビ共同視聴アンテナが設置されている。ところどころに湧き水を取ったカーが残されている。戦後の一時期、簡易水道の水源地になったところだ。

丘の上のほうにいかなくても、我が敷地周辺にもところどころ自然林が点在している。森として成熟していない所には、戦後米軍が種をまいたというギンネムやモクマオーがみられる。ある程度成熟している所では、次のような木々が見られる。アカギ ガジュマル オオバギ クロヨナ カシワ バゴムノキ（ベンガルボダイジュ） チシャノキ アコウ ホルトノキ ハゼノキ クロツグ リュウキュウマツ

写真 我が家屋上からタマグスク（一番高い所）を見る。自然林のなかに、ガマやカーがある。

2022年10月03日

2. 我が敷地の歴史

今回は、私たちが住む敷地周辺がたどってきた歴史を確認しておこう。

この敷地は、一番低い所で、海拔15メートル、高い所で30mの高低差が激しい傾斜地である。下水道も兼ねた排水路出口の一番低い所は道路に接しており、そこから南側は畑だ。我が家より北側は傾斜が続いて、高さ180mほどのタマグスクに至る。その途中は、ほぼ森である。

私たちが住む中山集落は、丘の中腹に位置し、丘の傾斜を下りきった所から海岸まで現在は畑地である。かつては、丘の中腹で水の便がいい所に畑を作っていただろうが、現在は少ない。現在の集落と海岸線の間にある畑地は、丘から流れてきた水が作った堆積地だろう。

以下、年表風に綴っていこう。

15世紀 我が家の東隣に、奥武島の人達の墓地が作られる

18世紀 隣の玉城集落と中山集落が分離 中山は、沖縄戦後に付けられた名称で、それ以前は、仲栄真（ナケーマ）である。

1945年 沖縄戦 艦砲射撃を受ける（推理）

それ以降、東隣の墓地は、自然林を復活させていく。

我が敷地は、いつからかサトウキビ畑となる。南隣は、水田（推理） 西隣は、サトウキビ畑（推理）

1960年代 周辺の水田はサトウキビ畑となる。

1970年代または80年代 我が敷地と敷地に接した隣地のサトウキビ畑は、徐々に耕作放棄地になっていったらしい。

1990年代 敷地は雑木林の感じになっていくが、土地の前所有者が、クルチ・金煌マンゴー・ライチなどの苗木を植える。

2002～3年 近隣に3軒の住宅が建つ。

2004年 土地が私たちの所有になり、住宅建設。

それまでの植物をできる限り残すために、土地造成はしない。東隣との境に高さ50cm足らずの境界壁を作る。

同年9月 居住開始 庭畑整備スタート

2007～2020年 西隣の境界近くにハブ取り網を設置

2020年ごろ 近隣に新たに5軒の家がたつ。

この敷地に人間が居住したわけでないが、サトウキビ生産など、人間によるなんらかの管理が行われてきた。しかし、急傾斜地のため、畑の期間は数十年、長くても100年にも満たないだろう。



この敷地は、中山集落に4つの班があるなかの3班に属している。3班の東端と西端には、川が流れている。丘上部にある現在のゴルフ場が水源地であり、2つの川は、丘からの傾斜がなだらかなるあたりで合流し、海岸に届く。この川をビングワールと呼び、我が家周辺地域もビングワールと呼ぶ。以前、よくお食事会を近所の人達とやったが、その愛称はビングワール会である。コロナで休憩期間が長くなったが、再開を願っている。

写真は、中山集落中央部

2022年10月09日

3. 「自然状態」のなかに建物をつくる

我が敷地が農地としての歴史が短いわけは、土質と急傾斜にあると推理している。クチャ（粘板岩層で硬くて岩状態）の上に琉球石灰岩がのる土質で、表土（落ち葉などがつくる腐葉土）は、急傾斜のために、雨のたびに流され、多い所でも、当初数センチしか堆積していなかった。クチャがむき出しのところもあった。

水を通さないクチャなので、大雨の際は、地面の上を水が流れ、ぬかるみが所々にできた。クチャは硬いので、鍬では歯がたたない。つるはしが必要と感じたほどだった。それでも、掘る必要がある時は、鉄製スコップでなんとか作業した。

大雨の際、地面のところどころから湧き水が出てきた。近くの垣花樋川と同じリクツである。規模は100分の一だが、その水で池を作ろうと思ったが、到底無理なことだった。

石灰岩には、大きな塊と、小さなカケラの双方がある。大きな塊は、2m以上のものがあり、隣地との境界になっている。カケラは、地面を掘れば、沢山出てくる。これを並べて、上からモルタルをかけて、我が畑庭の通路を作った。総延長数十メートル余りの通路は、18年間なんとか頑張っ



ている。建物脇の通路（東西に2本）は、なんども補修が必要だったが、西側は、追加工事の際に余った生コンを掛けてもらって、なんとか維持できるようになった。東側は、素人工

事ではうまくいかないで、2年前に業者にコンクリートで階段を作ってもらった。

建築前に地質調査のために二回のボーリングを行ったが、地盤は硬く、こうした傾斜地のためのパイル打ちは不要となった。要するに、硬いクチャ層ががちりできているのだ。

もともとの自然をできる限り残したかったので、地面をならすような宅地造成工事はしなかった。業者にやってもらったのは、建物建設で邪魔になった樹木（ライチ、クルチなど）の移植と、庭畑の中間地点に石垣で段差をつくったもらったことだ。

こうした「自然状態」に建物をつくったのだが、それがハーモニーをつくりだしたかどうか、はまだ評価できない。自然と一体化した建物という夢はこわさないようにしたいが。

写真は、我が家から見た中山の畑と海岸、そして奥武島

2022年10月15日

4. 我が敷地の大木たち

森に近い状態だった我が敷地では、日照をめぐる植物間競争が激しい。5年前まで敷地内にあったガジマルと金煌マンゴーが高さ5mを越し、枝が広がって周りの植物を日陰にしていた。このままにして、益々大きくなると私自身が管理しきれないと判断して伐採した。すると、それまで日陰だったリュウゼツラン、ハンギングヘリクニア、ゲッキツなどの植物が元気よく生育してきた。

この2本の他に、10年以上前から生育しているもので高さ4～7mになる大木も増えてきた。

マニラヤシ アレカヤシ トックリヤシモドキ クルチ (リュウキュウコクタン) クロトン シマトネリコ ティートリー チシャノキ シャリンバイ ゲッキツ バンシルー サガリバナ ドラセナ・コンシンネ ミルクブッシュ フウリンブツウゲ

これらを伐採するつもりは、いまのところない。しかし、年数がたつにつれて、樹高が7～10mになり、樹間も窮屈になりそうだ。今後数年たつと、少しずつ伐採していくことになるだろう。そうになると、そのころの私の身体では対応できないから、若い人や専門家に頼ることになるだろう。

伐採する以外に、大きな影響を与えるのは、台風のために幹・枝が折れる事だ。過去の例でいうと、ティートリー、キバナタイワンレンギョウが、根元近くで折れた。2022年9月の台風では、レモンユーカリが大きく傾いたので、幹の途中で切った。

10年ほど前から、目通り(高さ120cm個所での幹回り)を測定して、樹木の番付をつくっていたが、今年の段階での番付は、次のようになった。剪定で短くなったものもある。

() 付数字は推定の樹高 単位m

数字は、2022年9月1日 2021年7月20日 2014年 2009年の順

1位	チシャノキ	133cm (8m)	130 (8)	126	113
2位	フウリンブツウゲ (玄関脇)	131 (5)	77 (4)		
3位	トックリヤシモドキ	112 (4)	110 (4)	—	—
4位	ティートリー	94 (7)	87 (6)	35 (台風で折れたため)	47
5位	ライチ B	66 (4)	67 (3)	40	38
	サガリバナ A	66 (5.5)	67 (5)	—	—
7位	サガリバナ B	63 (6.5)	59 (6)	—	—
8位	フウリンブツウゲ A (庭)	57 (4)	77 (5)	—	—

クルチ A 57 (3.5) 56 (樹高はもともと6mあったが、剪定で3m)

マニラヤシ 57 (6.5) 51 (高さ6)

アレカヤシ 57 (5.5) 51 (5)

剪定などによりランク外へ ブーゲンビリア ライチ A レモンユーカリ



樹高でいうと、以上の他に、シマトネリコ6.5m、シャリンバイ6m、クルチB6.5m、ドラセナ・コンシンネ6mがあるが、目通りは大きくない。スラーっとしているということだ。

写真は、ティートリー シマトネリコ クルチ サガリバナ アレカヤシなど

2022年10月21日

5. 中低木たち マッコウなど

庭のあちこちにあるマッコウ（ハリツルマサキ 写真）は低木だが、日照があってもよいし、なくてもよい。それなりに育つ。日陰だと、ひょろっとして来る。岩の上で日照がよいと、這うように伸びる。マッコウは、私が植えたわけではなく、すべて自生で、総計すると十数本になりそうだ。種が落ちて発芽してくるものが、毎年数十にもなるが、多すぎるので、気づき次第取っている。この土地と気候が合っているのだろう。

高木でもないし低木でもないものとして、クチナシ、千年木、コルディリネ、コンシンネなどがたくさんある。大きく美しく白い花のクチナシは自生で2本育っている。コルディリネの仲間である千年木は、自生のものを挿し木でどんどん殖やしてきて、百本近くになっているだろう。日よけ用、垣根用といろいろと活用できる。成長も速く、5年で3～4メートルに達する。コンシンネは、贈呈されたものや私が買ったものを地植えにしたが、順調に育っている。挿し木で殖えるので、あちこちに20本余り植えている。葉が赤っぽいものと緑っぽいもの、ツートンカラーのもの3種類ある。

樹木といえるかどうかは微妙だが、日照大好きトップは、いうまでもなくサボテン類、ユーフォルビア類だ。代表するものというと、ドラゴンフルーツだ。我



が家では、屋上で鉢植えにしている。3月頃に堆肥をあげるだけで、手入れは、古い枝の整理と草取りぐらいだ。屋上だから水かけはできない。自然に任せている。それでも枯れることはない。毎年、30～50個ほど収穫している。

他に、ラクティア（マハラジャ）と大雲閣を何本も庭の中央で育てている。姿かたちがすごくて、珍しがられる。ラクティアは、インターネット情報によると、挿し木は難しいとのことだが、私が挿し木したものは、100%根付いている。インターネット情報は、ほとんどが本土規準で書かれているからだろう。

両方とも、近隣のかたからいただいたものを殖やしてきた。

現在高さ3mのパキラは、植えてから10年になるが、今年初めて開花した。その一つが実をつけ種を10個ほど生み出す。挿し木だと根が太らないが、実生だと、根がふっくらと太るとのこと。そこで、9月に種をまず小鉢に植えてみる。そのうち5本が発芽し、一番早いものは、すでに葉を広げている。いずれ定植する予定。楽しみだ。 後日談 残念ながら、すべて定着しなかった。

2022年10月27日

6. 日照を好む植物（1） 果樹 花木

果樹も日照を欲しがるとし、手入れをかなりしなくてはならない。それでも、それなりの収穫があるので、楽しい。

すでに収穫しているもの

ライチ ピタンガ アセローラ カニステル インド
ナツメ バンシルー（グアバ） バナナ ドラゴンフル
ーツ

植えて年数が短くて、本格的な収穫はまだで、今後の収穫に期待するもの。

アメシヤ シーカーサー（カミキリムシに食べられることが多い） キンカン ユズ ジャボチカバ

最近、レモンにも再挑戦している 柑橘類は、何度も挑戦してきたが、低い成功率にも関わらず、何度もくりかえしている。

コーヒーも果樹になるかもしれないが、これは半日陰を好む。コーヒーは近隣の方にいただいた苗を育てたが、初めのうちは面白く、山原のコーヒー農園の方に育て方を習ってから順調に育ってきた。自分たちで何杯も飲めるほどになった。しかし、皮むきをはじめとして、



多くの手作業が必要で、面倒になってきたので、縮小方針に切り替えた。この先10年後には「終了」するだろう。

果樹は、たいていのものは、かなりの手入れが必要で、私の体力を考えると、縮小方針に移行するしかないだろう。

花木も日照を好むのが普通だ。 フウリンブツソウゲ ハイビスカス・フラミンゴ 他にハイビスカス3種 タイワンレンギョウ (デュランタ) キバナタイワンレンギョウ プルメリア ブーゲンビリア サガリバナ (開花は夜だが、日照を好む) ミニバラ サンダンカ (高くなるものと、低木のままのもの二種類 花の色は、赤・ピンクなど) クフェア

写真は、サンダンカ (ピンク色)

2022年11月02日

7. 日照を好む植物 (2) ツル性植物など リュウゼツラン 月桂樹

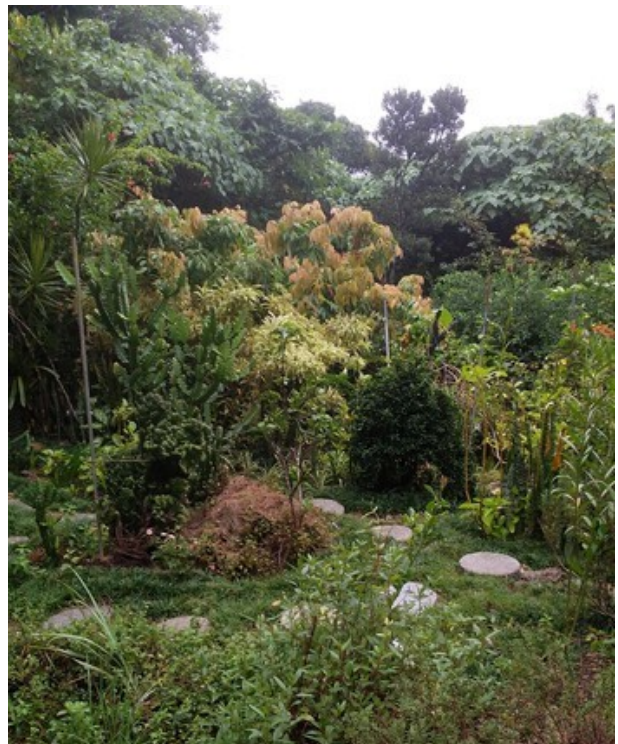
わが庭はツル性の花木も多い 自分で伝って広がっていくので、その性格を利用すれば、人間の手が届かないところまで頑張ってくれる。開花の際に、大量の花を見せてくれるものが多い。スイカズラ ニンニクカズラ リュウキュウテイカズラ

また、寒い冬を除いて、常時開花させるものもある。オオバナアリアケカズラ アサヒカズラ (ニトベカズラ)、ヤハズカズラ、サンバラソル (マンデヴィラ)、ジャスミン・マツリカ

オオゴマダラの食草であるハウライカガミもツル性で日照を好む。花は人間の眼には美しいとはいえないだろうが、花が出す蜜の香りは、蝶たちにとってはとても魅力的なようだ。葉を食草とするオオゴマダラだけでなく、アサギマダラ、ツمامラサキマダラなど数種十数羽が群がることしばしばだ。

ここ十年間育ててきたパッションフルーツもツル性で、果実を沢山実らせてきたが、なぜか最近、実を付けなくなってきたので、止めた。

野菜類では、ウリズン豆 (リュウキュウシカクマメ) を育てている。一度植えると、多年草化する。今年は3本の苗にしているが、本格的収穫は9～11月だ。盛りのころには、一日50個も収穫する。



ヒハツ（ピパーツ）は、薬効で評判のツル植物だが、したたかに生育する。赤い実が香辛料として人気がある。

他に日照を好む植物 リュウゼツラン（日陰でも結構育つが） 月桂樹 ダイギンリュウ ナヌス（日陰でも育つ）などがある。

リュウゼツランは、隣人と植物交換して植えたものだ。植えて何年かすると、幹が出てくる脇から新しい株が顔を出すので、それを株分け移植すれば、どんどん殖える。我が庭には、現在10株余りある。これが、テキサスの原料でメキシコでは大量栽培しているとのことだ。開花すれば新聞記事になるほど、滅多に開花しないが、最古参で15年を超える一株が、10月に開花し、11月2日、最後の開花を確認した。

月桂樹（ベイ、ローレル）は、月桂冠、リースの材料になるし、葉は、西洋料理で和食だしのような味付けにも使われるハーブの一種だ。わが庭では、最初に植えた場所が、周りの木々が大きくなって日陰を作ってしまったので、数年前に移植した。3～4年経った現在、ようやく元気を取り戻して、新芽新葉新枝をいくつも出している。

滅多に開花しないが、最古参で15年を超える一株が、10月に開花し、11月2日、最後の開花を確認した。

月桂樹（ベイ、ローレル）は、月桂冠、リースの材料になるし、葉は、西洋料理で和食だしのような味付けにも使われるハーブの一種だ。わが庭では、最初に植えた場所が、周りの木々が大きくなって日陰を作ってしまったので、数年前に移植した。3～4年経った現在、ようやく元気を取り戻して、新芽新葉新枝をいくつも出している。

2022年11月08日

8. 日照を好む植物（3） 花々

花をつける草類で、日照を好むものは、わが庭に彩りをつくる中心だ。庭・ベランダのあちこちで育てている。ほぼすべてが多年草化している。

ナデシコ トレニア・コンカラー 日日草 ペンタス アマリリス

トレニア・コンカラーは、長年育てているが、ようやく土地に馴染んできたのか、何もしないでも種こぼれで、春に発芽し、夏から秋にかけて、数十株も広がるほどになった。現在は、ピンクと紫の二色だ。ランのような形の花が魅力的だ。

日日草は、最初は苗店で買ってきたもので、赤、ピンク、白の三色と、そのヴァリエーションを含めて五色育てている。挿し木で殖やしていったので、現在20以上の株が、ベランダと庭で咲き誇っている。強いので、年中咲いている。駐車場のアスファルトのひび割れから新芽を出して開花させることもよく見かける。

ペンタスは、5枚の花びらをもっているのので、5の意味を含むペンタスと言う名がついている。無



数の花が集まったものが、数十個も一株につける。花がら摘みを重ねれば、すぐに新しい花が咲く。花の色も白、紫、赤などと多彩だ。食べられる花であることを最近知った。

アマリリスは、前土地所有者が植えていたものだ。集落のあちこちで見かけるので、20年以上前に、集落で一斉に植えたのかもかもしれない。わが庭には、数十個の球根が育っているが、手入れをしないできたので、一年に十数個しか咲かない。最近、ようやく手入れをするようになったので、もっと咲くだろうと期待している。東村で買った大型球根も育てているが、しばしうまくいかなかったが、昨年ぐらいから開花するようになった。

セイロンベンケイ、花キリンは草ではないが、何に分類したらよいだろうかわからない。セイロンベンケイは、落ちた葉から新しい芽を出すほどの生命力なので、繁殖しすぎの印象だ。毎年半分ぐらい整理しているが、それでも元気よい。花がユニークだ。

花キリンは、これまでに日陰化した所で育てていたもので、日当たりが良い所に移植したら、劇的に立派になってきた。まもなく管理しきれないほど繁殖するかもしれない。

写真は、リュウキュウアサギマダラとリュウキュウミスジ

2022年11月14日

9. ハーブ 日照を好む植物（4） 花々

ローズマリー、ミント類、タイム、レモングラスなどのハーブ類のほとんどが日照を好むが、沖縄の夏の太陽は強すぎると叫ぶものも多い。その代表は、ラベンダー。レースラベンダーだけが、沖縄の夏を生き残るといわれているが、それでも日差しを避けないと、消滅してしまう。他のハーブも、沖縄の夏は明るすぎると叫んでいるようだから、多少の日陰をつくってやる。

私がハーブに夢中になったのは、この地に住み始める前だから、もう20年以上の付き合いになる。しかし、何年もつきあっていると、「いい加減」になってくる。

苗店に出ているものを片っ端から植えたので、100種を越す。そのうち、多少は成功したものは、半分ほどだ。そして、いまでも付き合い、育てているのは20種ほどだ。収穫以外の手入れはしな

いことにしてから、そういう結果になっている。自分ながら、「仕方がない」と思っている。

そんななか、沖縄で日常的に見かけるハーブ（琉球ハーブと呼ぶ人もいる）、たとえば、フーチバー、月桃、シソ、アロエなどは、失敗しないものだ。

西洋ハーブにも、悲惨な手入れにも負けずに生き残るものがある。それをいくつか紹介しよう。

ミントはシソ科で強いが、なかには数か月しかもたないものもある。しかし、手入れなしで、何年も元気なのは、アップルミント、クールミント、バナナミントである。ほかに細々と生きているのは、ブラックミントなどだ。マウンテンミントは、最初にうちは苦勞していたが、最近は逞しく生きている。

ミントに似たものに、レモンバームなどがある。

タイムやローズマリー、そしてレモングラス、ステビアは、ハーブティーを美味しくするうえで欠かせないので、少しは力を入れて育てている。ステビアが休憩する夏から秋には、メキシカン・スイート・ハーブで、甘味を代用している。

私が日常的に愛用しているハーブティーには、これらを10種ほど混ぜている。

野菜用ハーブとしては、ルッコラ、コリアンダー（パクチー）、チャービルを育てて、美味しく食べている。

失敗の代表はカモミールだ。育たないわけではないが、活用できる程に栽培するには、それなりの手入れが継続的に求められる。

他に、衣装箱の防虫対策で、ベチパーを育て、フーチバーと月桃の葉を混ぜて乾燥させ使っている。効果は上々だ。

このように、ハーブは私たちの生活に不可欠で、使うことが生活習慣化している。

このまま続いていきそうに感じる。

2022年11月20日

10. 観葉植物 半日陰・日陰を好む植物

日照を好むものをたくさん植えていると、どうしても日陰が増えてくる。そこで、日陰・半日陰の植物が活躍する場が増えてくる。建物の北側に位置する中庭などはほとんどが日陰だ。さらに、隣地の耕作放棄地に伸びた大木が陰を作っている庭の南側も日陰植物向きになっている。チシャノキなどの高木が広がる西側も、広い日陰を作っている。

観葉植物の多くは、半日陰・日陰で育つ。熱帯・亜熱帯の森林で、巨樹の下で生育しているものが多いから、そうなるのだろう。本来日照を好むけど、やむをえず日陰で育てているものが多いが、日当たりが悪くても元気よく育つものが多い。そんなこともあってか、我が庭の50%近くが観葉植物

園っぼくなっている。

代表的なものは、クワズイモ類だが、これは自生して大きくなるものだから、時々取り払っている。大都市のお店で、クワズイモが高価で売られているのを見て、多少は育てる気持ちが芽生えた。

モンテスラ類も代表的なものだが、これは沖縄でも結構な価格で売っている。最近、小ぶりの二種が売られていたので植付けた。以前に買ったマドカズラもこの仲間のような。ということで、現在4種を育てている。

大量に育てているのはサンセベリアだ。住み始めた頃、記念品で沢山いただいたものを庭のあちこちに植付けたら、順調に育ち、現在では数百本になるようだ。マイナスイオンを出すと言うので、人気が高いものだ。それでも、はみ出して出てくるものは、遠慮なく取っている。

もう一つ、記念品を庭植えして増え続けているのは、ディフェンバキア。現在、30～40本ぐらいだろうか。挿し木で簡単に殖えるし、管理も楽だ。姿と色が美しい。高さ1m以上のもの10本ぐらいが、2022年の台風11号の風で傾いたので、切って挿し木した。

美しいのはドラセナ類。代表的なのはマッサンゲアナ。通称マッサン。これまた記念品で頂いたものの地植えだが、挿し木で殖やした結果、現在数か所で10本ほど育っている。高いものは3mを越すが、さらに高くなりそうだ。コンシンネも同様で、十数本になる。一番大きなものは、高さが6mになる。

コルディリネもあちこちに10本以上育っている。コルディリネの仲間である千年木は、わが庭で一番繁殖している植物だ。

クロトンは、沖縄原産と思うほど、沖縄のどこでも見かける。変化が多様で、同じクロトンなのかと思うほどの違いがある。わが庭では、細葉を3～4種育てている。黄葉と赤と緑のツートンカラーの葉である。挿し木であっさり殖やせる。常緑なのがよい。日照を好むが、日陰でもそれなりに育つ。大きくなると、4～5mになりそうだ。バリ島では10mの高さで、葉の面積も沖縄の数倍になるものを見かけた。

2022年11月26日

11. シェフレラ アグラオネマ 月桃 (サンニン) ハンギングヘリクニア

レッドジンジャー

今回は半日陰・日陰を好む植物で観葉植物(続)の話。

シェフレラ(カポック、ホンコンカポックと言う名前でも知られていたが、これらは誤りということだ)。これまた記念品で頂いたものを庭に植えたものだ。日陰に植えたが着実に生育し、挿し木で殖やして、現在数本になっている。小片が十枚近く団扇(うちわ)のように並んでいる葉がかわいい。

アグラオネマは、樹木ではなく草類だろうが、茎が地面をほうように伸びて広がる。日照があつて

もなくても育つ。シルバーとレッドがあり、双方とも育てている。付き合いはまだ数年で、大きく伸びるとどうなるかは、よくわからない。

樹木ではないのに、大きくなるものがある。月桃、ハンギングヘリクニア、レッドジンジャー。これらも、日照があってもなくとも育つ。

月桃（サンニン）は、沖縄のどこにでも自生している。わが庭にも当然自生している。高くなると、3メートルほどになる。花の美しさがすごい。大きな葉が、ムーチーを蒸すために使われる。香りがいいのだ。虫よけにもなる。防虫剤にも使えるし、茎葉を庭の通路に敷くだけで、虫よけになる。種が飛んで新苗があちこちから顔を出す。成長スピードが速いので、すぐに他の植物をかき分けて大きくなり圧倒しそうになる。

ハンギングヘリクニアは、頂き物を庭植えしたものだ。繁殖力旺盛で広がり過ぎるので、毎年半分以上切っている。新芽も8割ほど取ってしまう。そうしないと、密植状態になり、枝葉自身の重みで全体が傾いてしまう。それでも、現在は20本ほどが束になっている。高さ2mを越すぐらいの所から、真っ赤なものが出てくる。それが垂れ下がり（だからハンギングというのだろう）、10～20個ほどの段状になって重なる。赤いもののなかから黄色いものがでてきて、開花となる。葉の先端は、高さ3メートルを越す。風が吹くと、全体が傾く。まさに熱帯を感じさせる。最近、生花に使われていることを発見。

レッドジンジャーは、一昨年知人の植物専門家から頂く。日当たりがいい場所がなかったので、日陰に植えるが、元気よく生育する。現在10本ほどが、高さ1m前後になっている。伸びた先に赤いものを付け、その中から黄色い花が出てくる。

月桃やウッチンもそうだろうが、ショウガ科は生命力旺盛だ。

2022年12月02日

12. オオタニワタリ 地面近くの植物

我が庭の森林状態の所の地面近くなると、日照ゼロに近くなり、草・シダ・苔・地衣植物が多くなる。わが庭で、大きな面積を占めているのは、オオタニワタリ、ポトス、マメシダ、ヤリノホクリハラン、ムラサキオモトなどだ。

オオタニワタリは、近隣と植物交換して植えたものだ。孢子が飛んで広がる。庭のあちこちで育つが、通路の石の上、高木の幹にも育っている。現在数十本にもなるだろう。葉が大きく広がると、直径2メートル近くなる。葉が出てくる所の下部には、黒い幹状のものが徐々に積み重なり高くなっていく。わが庭では、まだ年数がたたないで、せいぜい30cmくらいだ。

新葉は食用になると言うが、私たちは食べたことがない。



ポトスは、愛知でも育てていたが、葉の大きさが全く違う。愛知では10cm以下だったが、ここで大きいものは、30cm以上になる。日当たりがいい所では、それ以上だ。茎も図太くなる。

繁殖力旺盛で、他の植物を圧倒してしまうし、樹木を上っていつってしまう。そこで、8～9割は除去しているのが現実だ。それでも、気づかない所で伸びていく。「害草」扱いに近い。

マメシダも、美しいが強力だ。地下茎のようなもので、どんどん広がる。そこで、どんどん除去するのが現実だ。

ヤリノホクリハランは、庭の石垣に自生していたものだ。地下茎のようなもので広がっていく。美しいので、最近移植で殖やすことに挑戦しはじめた。

ムラサキオモトは、苗店で購入したのか、頂いたものかは忘れてしまった。葉の表は緑、裏は紫で美しい。茎が広がって分かれて広がっていく。

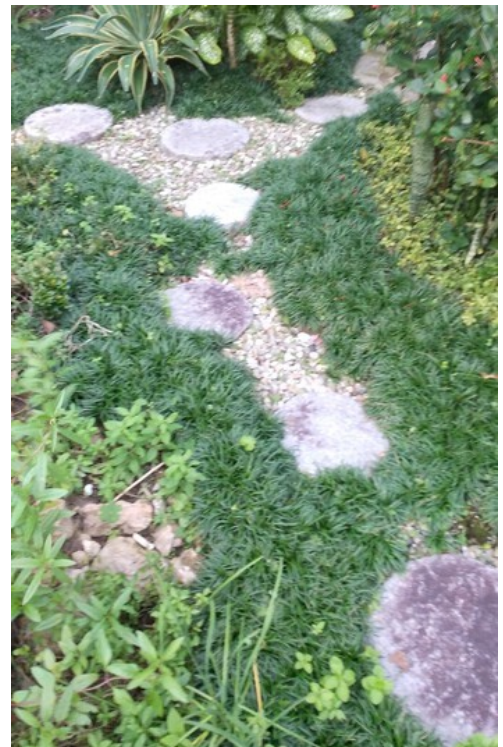
地面近くで最も多いのは、ハーブ類だが、それは別の所で紹介することにしよう。

2022年12月08日

13. タマリユウ グランドカバー

地面を直におおう植物をグランドカバーという。近隣では芝生にすることが多いようだ。我が庭も、以前はコウライ芝を植えていたが、いい加減な植え付けをしたので、管理が大変になり、やめた。でも生き延びたものが、タマリユウの間から伸びてくることもある。芝生は簡単そうに見えて、失敗話をよく聞く。上手くやっている人は、下ごしらえから、かなり手間暇をかけている。

わが庭で圧倒的に多いのは、タマリユウだ。リュウノヒゲ(ジャノヒゲ)を改良して、背丈を短くしたものがタマリユウだと、ウェブでは説明していた。タマリユウは、時々「先



祖返り」をして、背丈が高いリュウノヒゲに戻ることがある。

18年以上前に住んでいた愛知の家で育てていたものだ。その一部を引っ越し荷物といっしょに、沖縄まで持ってきて植えた。一週間ほどの船旅にもかかわらず、ほとんどがしっかりとしていたので、精力のある植物なのだろう。根に栄養分を蓄える白い所があるのが、強い一つの理由だと想像している。

最初は、庭の区画と通路に沿って、縁取りとして点状に植えた。数年すると線状になり、10年を越えて面状になるところが増えてきた。植えっぱなしで大丈夫だ。一ヶ月近く、降雨ゼロに近くなると、悲鳴を上げるが、そんなことは、これまでに1-2回あっただろうか。半日陰でも大丈夫だが、全くの日陰では育たない。

近年、沖縄の苗店でも時々見かける。以前は珍しかったので、希望する方に差し上げたこともあった。精力があり、かつ美しいので、人気が徐々に出てきたようだ。沖縄では供給不足なのだろう。見かけることは滅多にない。そんなこともあって、わが庭の自慢の一つになっている。

オリズランも庭のあちこちで育っている。ランナーと呼ばれる、ツルのようなものを葉の元から延ばして、先端から葉と根を出す。ランナーの途中から切って植えれば、殖やせる。実に簡単だ。根元から、栄養分を蓄える（私の推理）白いものを出す。小さくて可愛い花もいい。

タマリユウは踏んでも大丈夫だが、オリズランは、そういうわけにはいかない。ということで、わが庭のグランドカバーのほとんどはタマリユウで、オリズランが少しといったところだ。

2022年12月14日

14. 酸性土を好む植物は苦難の道を歩む

沖縄の南部の土は、島尻マージかジャーガル（風化し、有機分を含んだクチャ）だ。いずれもアルカリ性で、日本全体で見ると、きわめて例外のようだ。わが庭は、ジャーガルだが、地面を掘れば、すぐに硬いクチャになる。

ということで、酸性土壌を好む植物は耐えきれない。植えても、1～2年で絶える。鉢植えにしても、なかなか難しい。我が庭でそんな可哀そうな目にあったものは、リュウキュウサザンカ、サツキ、テンニンカ、ブルーベリー、アボガドなど。

大型のどんぐりがつくオキナワウラジロガシもその一つだ。8年ほど前に、久米島の友人からどんぐりをいただいて育て始め、無事発芽し、育ち始め、露地植えしたが、1mほどの高さになって、ついに断念せざるを得なかった。これまた土が要因だろう。

酸性を好む植物を育てるためには、酸性である鹿沼土やピートモスを大量に入れる必要がある。そうしたことをした後で育てたものは、一応成功している。 コーヒー、椿、ライチ、柑橘類、サンパラソル。

これらもいろいろと苦労している。ライチやコーヒーのように果実が有益だとか、サンパラソルの

ように美しい花だとか、あきらめきれない魅力を持つ者が多い。果実は、収穫期以外の手入れに結構手間暇がかかるし、収穫自体が大変だ。私の加齢にともない、いずれ縮小していくことになるだろう。

2022年12月20日

15. 自生の植物たち

庭の植物で手入れの必要が少ないのは、自生のものだ。もともとこの地に棲んでいたものだから、当然だ。雑草とみなされているものは、ほとんどがそうだ。そして、月桃、長命草、リュウキュウコスミレ、カニクサ、苧麻、ヤリノホクリハラン、などもそうだ。ヤリノホクリハランという長い名前の由来は、「檜の穂」のような「クリハラン」ということのようなのだ。

※シュロガヤツリも自生種だと思っていたが、調べると、マダカスカル原産で帰化植物とある。

草だけでなく、樹木にも自生のものがある。チシャノキ、シャリンバイ、ゲッキツ、クチナシがそうだ。

風や鳥が運んできたものが発芽して成長してくることもある。代表的には、アカギ、オオバギ、ガジマル、カシワバゴムノキがそうだ。マキ（チャーギ）もあちこちから芽を出している。マキだけは貴重なので、数本育てている。しかし、成長が遅いので、一番大きいもので、十数年たっても高さ50cm余りだ。クルチ、マッコウ、シマグワは、落ちた実から新しいものが出てくる。とくにクルチ、マッコウは、毎年数十本も新芽が顔を出す。しかし、もうこれ以上不要なので、除去している。

ガジマルもその一つだが、庭畑では、他の植物を圧倒してしまう。そこで、鉢に一本だけ育て、大型盆栽風に大胆な剪定をしている。だが、鉢の底から、根がどんどん伸びてきて、知らぬ間に2～3メートルになってしまう。頻繁に、伸びた根の管理、枝葉の整理が必要だ。

我が庭畑に自生していたわけではないが、沖縄自生と思い込んでいた植物であるサンダンカの購入苗を植えた。ずっと以前のことなので、何本植えたかは記憶していない。結果として大きくなっているものから考えると、3種のサンダンカを植えたようだ。一つは、背が高くなるもの。二つは、少しずつ伸びて丸い形をつくるものだが、花の色が赤とピンクの二種ある。これらも、こぼれ種からどんどん広がってきて、今やわが庭に20～30本ある。そのまま伸ばしていたり、移植したりしている。とても強いし、植えっぱなしでも、元気よく開花してくれる。さすが自生種だと思う。

※ テレビでラオス風景が登場した際に、サンダンカがたくさん写っていた。東南アジアに広く見られるようだ。

サガリバナ（サワフジ）は、沖縄自生の代表的なものだろう。調べてみると、アフリカ・アジア・太平洋の熱帯・亜熱帯に分布しているという。その自生の一角に沖縄も含まれているようだ。

2022年12月25日

16. 自生種と外来種

以前、濱川御嶽あたりで、生物専門家と話をしていた際、植えられたばかりの花々を見て、彼女が「こういう沖縄らしいところに、外来種の花を植えるのはどうかなあ」と語っていたことが記憶に残っている。当時は至る所に、インパチェンスやベコニアを植えるのが流行だった。海外に出かけても、この二種には至る所で出会った。それ以来、私はこの二種を育てないできた。

でも、前回書いたシュロガヤツリ（写真）が、濱川御嶽の隣接地で大量に生育していたので、多分自生種だろうと思い込んできた。しかし、念のため調べると、前回書いたように、マダガスカル原産だとのことだ。

わが庭の植物にも自生のもので、沖縄固有と思い込んでいたのが、実は外来種かもしれないと疑いを持つようになった。そこで、沖縄自生と思い込んできたソテツ・クロトン・千年木も自生種だろうか。ということで、調べてみる。

ソテツは、日本の固有種とある。ひとまず安心。

クロトンは、「西太平洋諸島～パプア・ニューギニア」原産とあるので、外来種のような。10年ほど前にバリ島を訪問した際に、沖縄のものより倍以上の大きさのクロトンを見て、驚いたことがある。

千年木も、「原産地は中国南部からオーストラリア北部」とある。長い間、沖縄自生種と思い込んでいた私には、ショックだ。

ややこしいのは、ブッソウゲだ。沖縄ではアカバナと言う言葉を使うことがあるが、本州あたりでは、全く別の植物を指す。墓地に植えて屋敷地には植えないといわれてきたブッソウゲは、沖縄ではアカバナと通称している。屋敷地ではめったに見えないが、生垣で見ることがある。この原産地はどこだろうか。ウェブで調べると「原産地は不明」とでてくる。また、「本土への渡来は、慶長年間（1610年頃）に薩摩藩主島津家久が琉球産ブッソウゲを徳川家康に献じたのが最初の記録として残っている」とある。

こうしたものを参照して考えると、沖縄が原産地の一つであるとは断定できないが、かなり古くから育てられていたとはいえよう。

そして、近年になって、ハワイをはじめとする世界各地から、多様なものが移入されてきて、そうしたものを通称ハイビスカスと呼んでいるのだろう。



そうしたものの多くは園芸品種であり、手入れをあまりしない私が植えると、1～2年で消滅するものが多い。

そんななか、フウリンブッソウゲとフラミンゴ（二段咲き）だけは、定着してぐんぐん伸びていて、剪定作業が年に数回必要となる。フウリンブッソウゲの原産地は東アフリカとある。フラミンゴの原産地は調べてもわからなかった。多分、園芸品種として、どこかで開発されたものだろうと推定する。

写真はシュロガヤツリ

2022年12月31日

17. 外来種が圧倒している 庭の動物の生存競争 カラスとツミ

わが庭の植物の大半は、私をはじめとする人間がもちこんだもので、外来種が多い。観葉植物やハーブは、圧倒的に外来種だ。野菜にしてもモロヘイヤのように、外来種が多い。そのなかで、琉球ハーブが注目されているのは、心強い。

こうやって振り返ってみると、私が自慢している植物も、外来種が多い。オセアニア原産のティートリーが、その代表格だ。ブーゲンビリアもそうだ。果樹でいうと、ライチが中国南部原産ということで、これもまた外来種だ。

さらに本土からの移入種まで含めると、ほとんどが外来種と言えそうだ。

そんななか、植えて数年しかたたないのに、もう7メートル近くになるシマトネリコが、沖縄にもともと分布していると書いてあった。おまけに、カブトムシが好むとある。カブトムシ・クワガタ大好きな小学生がいるが、わが庭にはクヌギがないので、採集は無理だと話した。でも、カブトムシがシマトネリコの樹液も好むと本に書いてあったので、情報訂正をしなければならない。いつか、近隣の昆虫好きな子どもたちが訪問するかもしれない。

ちなみに、シマトネリコは、キンモクセイの仲間ということだ。

こんな風に、わが庭の植物を調べていくと、知らないことだらけだった。さらに学習を深めていこうと思う。

わが庭には、動物も多い。大部分は昆虫だが、動物間の生存競争は激しく、闘う場面を目撃したことも多い。生存競争の頂点にいる動物は、爬虫類のアカマタ（ハブはその次に位置する）、鳥類のカラスと推理するが、その彼らの上にたつのが人間であろう。我が猫たちは、どのあたりに位置するだろうか。2年前には、ハブと戦って、かまれてしまった。勝敗の判定はついていない。

私たちがここに住んで18年以上になるが、この間の動物界の最大の変化は、カラスの登場だ。カラスが登場したのは10年ほど前だ。それ以前は、時に見かける程度だった。徐々に増えていき、今ではほぼ毎日、数羽いるようになった。ねぐらをつくっているのもいるようだ。わが庭のなかには

なく、庭を取り囲む森の高木で寝泊りしているようだ。おそらく、那覇などの都市部から徐々に勢力圏を広げているようだ。

カラス登場前に、生存競争の頂点にいたのはツミ（猛禽類 小さな鷹）だ。小鳥も食べるようだ。我が家近辺のツミは、一羽で行動し、電柱のてっぺんで、あたりを見回している。キーキーと高く大きく鋭い声で鳴く。調べると東京あたりでも生



息しているようだ。渡り鳥でもあるが、このあたりでは留鳥のように思う。リュウキュウツミとツミとの違いはわからない。私が見ているのは、どちらかも、まだわからない。南城市の各地で見かけた経験がある。

カラスと闘うが、一対一ならツミが勝つが、集団のカラスだと、ツミは逃げ出す。最近では、カラスの集団が大きくなって定着しつつあるので、ツミを見かけることが減った。

ところが。12月になって、カラスが減り、ツミがつがい飛んでいるのを見かけるようになった。観察を続けよう。

写真左から、ティートリー、シマトネリコ、サガリバナ

2023年01月06日

18. 鳥

前回、10年位前からカラスが増えてきたと書いた。そのカラスたちが引き起こした変化は、なによりも鳥の変化だ。ツミの減少を前回書いたが、著しいのはスズメの減少だ。15年前は、スズメ集団の音がうるさく感じられるほどいた。それがすっかり移動した。近辺で時々、スズメ集団を見かけて、久しぶりだと感じるくらいだ。

イソヒヨドリ（スーサー）も減ったように感じる。私たちが生活し始めたころは、中心の鳥だった。わが庭の木々には、毎年のように巣をつくって子育てをしていたが、ここ数年見かけない。同じように、来訪するメジロの数も減り、巣をつくるのが減った。

カラスがコウモリと闘うのも見かけないこともないが、カラスは昼間動き、コウモリは朝夕と夜に行動するので、出会うことは少ない。それでコウモリの生息数は減ってはいない。隣の森を根城にするオオコウモリもたくさんいるし大きいのが、植物食なので、他の動物を支配するわけではない。

鳥たちは、我が家近辺の丘にたくさん住んでいて、餌を求めて、わが庭にも押しかけてくる。たく

さん押しかけてくるときは、山の餌が減った時だな、と推理する。2～3月ごろと台風直後に多いように感じる。

カラスは、人間にも反応する。海岸散策に出かける時、カラスが私を警戒してか、監視行動を続けられて、面倒だなおもうことがある。

他によく見かける鳥は、タイワンシロガシラやメジロなどだ。彼らは群れで行動することが多くて、目立つ。

ハトは、1カップルが我が家周辺で生活していて、ベランダにしばしば登場する。ベランダ柵の上で、交尾なさることもある。

渡り鳥でよくみかけるのは、燕。春秋によく出会う。サシバも上空高く見かけることがあるが、短時間だ。

サギやチドリといった海辺の鳥が、海岸近くの畑や水路に顔を出すのをよく見るが、わが庭まではこない。

鳴き声をよく聞くが、本体を見ることは滅多にないのが、ウグイス。春先に鳴くというのは、本州の話で、ここでは、「季節を選ばない」と思うほどだ。

2023年01月11日

19. 海亀とモグラ

12月の話。海岸散歩の際、海亀の死体が漂着しているのに出会った。2～3年に一度ぐらいだが、見かける。可哀そうな話だ。私は見たことがないが、産卵のために上陸するのを見たという人がいる。自然海岸が減ったので、ウミガメにとっては受難といえそうだ。

最近、わが庭のところどころに、大きな穴が開く。私の推理だが、モグラの穴の出入口だろう。5年ほど前に切ったマンゴーの大木の根の後に、地



中通路ができて、そこを通っているのではなからうか。出口をふさいでも、くりかえし出口を作る。

2023年01月16日

20. ヘビ類 ツミの写真

今回は、いやなへびの話。わが庭周辺は森なので、色々なへびがいそうだが、これまでに出会ったのは、三種。なかでも、アカマタとハブ（ヒメハブを含む）。

どちらが強いのだろうか。ハブと言う人が多いだろうが、私は、アカマタだと思う。アカマタは、ハブをも食べるし、どう猛な性格なので、ハブより上だ。そのこともあって、アカマタは取ってはいけな



いときれ、「神」として敬意を表されてきた。

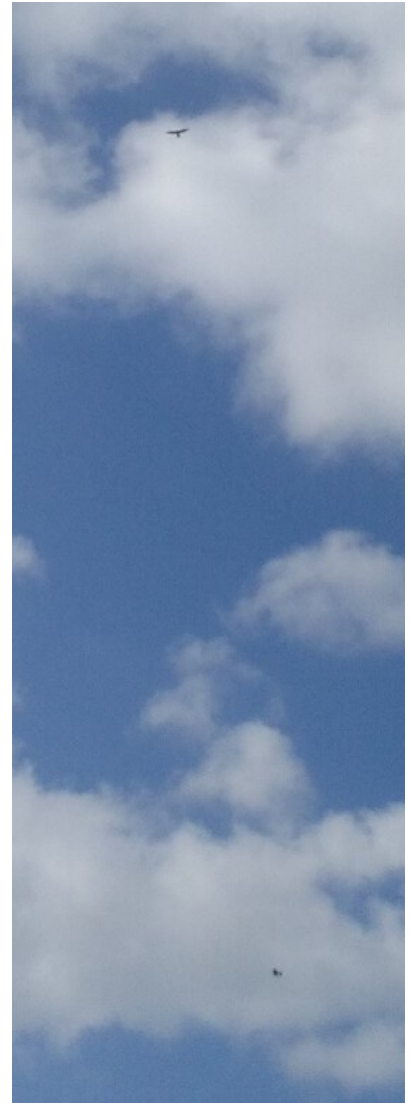
アカマタは、敷地内で数回見た。けばけばしい色と模様で、すぐに気づき恐怖を覚える。俊敏な動きなので、捕まえるのは難しい。丸めて置いた野菜畑用の網にひっかかったことがあり、もがいて、逆に出られなくなって息絶えたのが、

一回。ハブ取り網にひっかかって息絶えたのが一回。堆肥用に集めた落ち葉の中で動くものがあり、よくみると、アカマタ。

ハブ取り用網設置のいきさつはこうだ。ハブセンター職員が、我が中山

区長に、中山で一番ハブが出そうなところを尋ねて、我が家が紹介された。そこで指導されたとおりに設置した。

1. 5cmの網目の漁網を張るのだ。設置して1年で3匹がかかった。すべてヒメハブだ。夜中にかかったものを、翌朝発見。すでに息絶えている。もろいもので、2週間ぐらいすると、跡形はほとんどない。骨も小さいかけらという



感じだ。

その後、網は補修したり増設したりして、現在は、30mにわたって設置している。我が猫が、噛まれて以来、強化している。犬や人は、毒のまわりが大きい手足を噛まれて重篤なことになりやすいが、猫は、毒のまわりが大きい顔をかまれるという。猫は、正面向かってハブと戦うかららしい。我が猫も顔面広くかまれたが、命に別状はなかったが、それ以降、弱くなった印象だ。そして、行動に慎重さが出てきたように思う。

写真は、ツミ。このごろ、2、3羽が一緒になって飛んでいる。空を舞う写真は、3羽一緒だったが、大きく広がるので、2羽しか写っていない。

2023年01月22日

21. 動物の減少

ハブ・アカマタは、私がいろいろと手を打った効果があったのか、出現回数が激減した。加えて、マングースも減少し、我が敷地あたりでは、ここ数年見かけない。我が家から200mほど離れた住宅近くで見かけた話を最近聞いた。15年前は、よく出会い、我が家の窓の外から、室内の私を観察する姿さえ見た。その姿がとてもかわいい。ぴよんと二本足で立つのだ。沖縄全体で駆除が進行しているので、最近では、道路を横断する姿を見るのも稀だ。

ネズミも激減だ。以前よくみかけ、網戸を破って侵入してくるものさえいたが、最近では敷地内で見ることはない。おそらく、猫の御蔭だろう。ただし、隣の森でとらえてきたネズミを室内に持ち込んで、遊び相手にすることがある。その際は、私が捕らえて、隣の森に返す。隣の森のネズミも減ったように思う。

カエルは、小さなものが数種類いる。眼で見て発見することは難しい。ピョンと飛び跳ねて気づくことが多い。庭に池を作ってから増えた。池に卵を産み、オタマジャクシになるからだろう。卵にはいろんなタイプがある。池の表面より少し上に、大きな泡をつくって産み付けるのが面白い。

余りにも多いので、水草で池を覆って以降は、減少した。

グッピーは、大小の二つの池（プラスチック製）で飼っている。最初7つがいただったが、どんどん増えて、今では数百匹。どんどん差し上げているが、減少しない。毎朝餌やりだ。カダヤシ＝タップミノーやメダカも飼ったが、断然グッピーが強い。

2023年01月28日

22. トカゲ トンボ カタツムリ アオミオカタニシ

トカゲは枝の陰で生きているので、見つけることは多くない。でも、猫が時々捕まえてくる。色鮮やかだ。

トンボは、池を作ってから増えた。何種類もいるが、私には区別をつけて名前を示すことはできない。つがいで飛んだままで、池の上から産卵する。それがヤゴになる。強くて、グッピーなどをどんどん食べる。一時期グッピーが減ったが、原因はヤゴだった。池掃除をすると、いっぱい見つかる。殖え過ぎるので、水草で池の表面を覆ってから、減った。

カタツムリは、沢山生育している。葉野菜をどんどん食べるので、困ってる。ついでにいうと、40年ほど前の西原生活でよく見かけたアフリカマイマイは、ここでは見かけない。アーマンが殻として活用しているので、いるのだろうが。

アオミオカタニシは、かたつむりそっくりだ。殻の色が緑色だという点で異なる。調べてみると、タニシの仲間ということで、絶滅の心配があるという。数年前から、わが庭で殖えている。緑色が美しい。

2023年02月03日

23. バッタ オオジョロウグモ カマキリ ナナフシ セミ カミキリムシ ホタル

バッタの類はいろいろいるだろうが、私には種類がわからない。なぜだか近年増加傾向にあるように思う。いろいろな葉っぱが食べられてしまう。千年木やサンセベリアなども食べられている。

オオジョロウグモは、わが庭の至る所で活躍している。十数か所以上に巣を張る。通路の上に張って通行妨害になることはいつものことだ。張り始める5月には小さくても、10月には10センチ以上になり、立派で凄味がでてきて、客人を驚かせる。メスが巨大なのと対照的にオスが極小だ。一匹のメスに対して数匹のオスが、巣の端にひっそりという。交尾して、メスに食べられる話は有名だ。

他にもいくつかの種類蜘蛛がいるが、私は好きではないので、調べはしない。

カマキリも多い。葉蔭に隠れて、獲物を探しているので、想定外に遭遇することが多い。生まれたての小さいものでも、狩りの意欲がすごい。10年前の「カマキリがオオジョロウグモを襲って食べる」というブログ記事が、たくさんのアクセス数を記録した。鳥さえたべるといふオオジョロウグモをカマキリが食べるのだから、大きくなったカマキリはすごいと思う。

ナナフシも多い。しかし、枝の真似をしているので、見つけにくい。枝と勘違いして、思わず触ることもしばしばだ。時々、網戸にはりついて、じっとしていることがある。頭と尾の見分けも難し

い。じっと観察しないとわかりにくい。

セミも多いが、種類はわからない。5月ころからよく鳴く。わが庭だけでなく、隣の森で鳴くものが多い。時にはうるさいと感じるほどだ。セミがとまっている木の下を歩く時、気づかないでいて、「おしっこ」をひっかけられたことが何回もある。

セミの中で日本最小だというイワサキクサゼミを何度か見かけたことがある。これもセミなのかと思うほど小さい。

カミキリムシは、シークワーサーの葉を食べて弱らせ、枯らすほどだ。60年ほど前に、このあたりのシークワーサーに大被害を与えた話を近隣の方から聞いた。わが庭のシークワーサーも数年前にやられた。植えた2本目もそうなりそうだ。今3本目を育てている。

ホタルを、数年に一度見かける。数羽程度だが、美しい。繁殖させたいが、やり方がよくわからない。

子どもたちが好きなクワガタ・カブトムシはいなさそうだ。本には、シマトネリコに彼らが棲みつくを書いてあったので、期待はしている。

2023年02月09日

24. 蚊 蠅 アリ ごきぶり やすで おおむかで

蚊は結構いるが、最近減少気味だ。庭に蚊がいやがりそうな、ミントなどのハーブが多いためだろうか。以前の夏場は、網をかぶって庭作業していたが、最近は、その必要はない。でも、客人は刺されている。私の身体が、蚊に好まれないのだろうか。ほとんどが、落ち葉のなかに棲むやぶ蚊の類だろう。

部屋の中まで侵入してくるのは、ベランダの鉢底の受け皿などに棲むものだ。

蠅は、ほとんどいない。たまに、小動物の死骸に群がることもある。

アリは多い。多いアリが、室内まで侵入してくる。時に、室内のどこかに巣を作って棲むこともある。いろんな対策をして、最近では、少なくなっている。

ゴキブリは、庭や森の落ち葉の下などに隠れている。時々、室内まで飛んでくる。ハーブの一種ベチパーを嫌うと言うので、採取して乾燥させ、防虫袋に入れて、来そうなところに置く。

ヤスデを見かけるのは多くない。でも、数年に一回大発生する。通路に、何百もがかたまって出てくることがある。雨が多い季節だ。

オオムカデは、見るからに凄みがある。大きくなると、10cmをはるかに越す。室内に入ってくることも、稀にある。随分前のことだが、隣家の客人が噛まれて、病院にまで行ったことがあった。大した手当もしてもらえなかったが、大事には至らなかったようだ。

アリなどの多くの昆虫は、湿度の高い時期に繁殖し、室内にまで侵入することが多い。湿度が80～90%になる時は要警戒だ。我が家ではいろいろと対策をしたが、結果として、除湿器で湿度を下げるのが一番だ。湿気が多い時は、除湿器の水タンクから一日二回排水する必要がある。それは、ピアノや本にも有効だ。ということで、年中除湿器を動かしている。

2023年02月15日

25. ミミズ アーマン（殻争奪戦） モグラ カニ

地中の動物と言うと、ミミズだ。18年前、庭作業をはじめたころは、土らしい土でなかったの
で、ミミズもゼロに近かった。落ち葉など有機物を大量にすき込んで、土づくりをすすめていくと、
ミミズを見るようになった。そのミミズが、土をますます立派な土にする。今では、土を掘れば、必
ずミミズが出てくる。

土にトンネルを掘り、その出入口を作っているのはモグラだろう。もっとも実物を見たことはまだ
ない。

庭でよく出会うのは、アーマン（おかやどかり）だ。特別天然記念物であるが、それにしてもよく
見かける。とくに夏には、移動している姿をよく見かける。海岸に産卵に出かけることもあって、動
きが活発なようだ。

このブログでも報告したが、宿になる殻の争奪戦を見かけたことがある。体を大きくなるにしたが
って、殻を交換するのだが、その奪い合いをしている最中に、第三のアーマンがあらわれて、横取り
したのだ。

カニの大きいものを、時々見かける。10cm以上のものだ。アーマンやカニが、わが庭の池に入っ
て、出てこれなくなったのを助けたことがある。海岸から200～300m離れている我が庭だが、
海岸と往復する動物がいるのだ。

2023年02月21日

26. マダラチョウ科の蝶 オオゴマダラ カバマダラ リュウキュウアサギマダラ ツ

マムラサキマダラ

今回から3～4回に分けて、蝶を紹介しよう。わが庭では、暖かい季節には、常時10種以上数十羽の蝶が舞っている。隣接する森の木々を含めて、生育環境がいいからだと思う。

手元に、「生態写真で見る沖縄の蝶」（琉宮城蝶々園1999年発行）という本があるので、照らし合わせながら進めていこう。

まずマダラチョウ科。本には、カバマダラ、オオゴマダラ、アサギマダラ、リュウキュウアサギマダラ、台湾アサギマダラ、ツマムラサキマダラ、スジグロカバマダラの7種が掲載されている。このうち、見たことがないと断定できるものはないが、見たと断定できるものは4種。見たかどうか不明なのは3種。そのうちアサギマダラについては、リュウキュウアサギマダラとの区別が上手くできないので、自信がない。そこで、一年の大半の時期に見る4種について紹介していこう。

オオゴマダラは、わが庭で一番目立つ。日本最大といわれるほど大きいので、目立つ。庭の中央に、食草であるホウライカガミが広がっているの、生育に好条件なのだろう。多い時は、5羽ほど舞う。私が見ているのに、ゆったりと交尾する姿をみせることもある。ユラユラと優雅に舞う姿が愛されている。

年に何度か産卵し、金色のさなぎをぶら下げ、羽化していく。今年も、1月に産卵し、幼虫がホウライカガミの葉をほぼ食べつくしている。さなぎの写真は、昨日の記事に掲載した。

成虫になってからも生育期間が数か月と長いので、益々目立つのだろう。



カバマダラは、暖かい季節には常時見かける。食草であるトウワタが、庭に結構多いためだろう。食欲がすごくて、トウワタに幼虫を見つけると、瞬く間にトウワタが食べつくされている。

ツマムラサキマダラは、なぜだかわからないが、ホウライカガミに群がる。多い時には、10羽ぐらいが固まる。地味な色目だが、紫色が美しい。本によると、迷蝶だったが、1992年の台風以降、広がったとのこと。わが庭でも、たくさん見かける。

写真は、カバマダラの食草であるトウ

ワタで吸蜜するツمامラサキマダラ

リュウキュウアサギマダラは、年中よく見かける。

2023年02月27日

27. アゲハチョウ科 シロオビアゲハ アオスジアゲハ

アゲハチョウ科はわが庭に多い蝶だが、似たものが多く、種の特が難しい。そのなかにあっても、次の二つは区別が付きやすく、量も多いので、わかりやすい。

シロオビアゲハは、わが庭でもっとも見かけるものだ。オスは、まさに白帯をつけたような姿なので、区別しやすい。しかし、メスには、二種あり、オスのように白帯があるものと、ベニモンアゲハの擬態をしていると言われるものがある。この擬態のものを見分けは、私には難し過ぎる。たくさんいると推察されるが、特定することは、私にはできない。

名前の通り青筋が入った羽をもつアオスジアゲハは、隣の森に大好きな樹木があるようで、わが庭にもたくさん飛んでくる。

ジャコウアゲハ、ベニモンアゲハ、モンキアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、オキナワカラスアゲハ、コモンタイマイは、黒を基調にして、白が混じり、時に赤を組み合わせた美しい姿の蝶たちだが、わが庭を飛び交うものは、そのどれかが私には識別できない。シロオビアゲハのメスの一種もそれに加わる。いまのところ、私の推理では、ナガサキアゲハかシロオビアゲハのメスの一種だろう。

他に、「生態写真で見る沖縄の蝶」には、ミカドアゲハ、アゲハ(ナミアゲハ)が掲載されているが、わが庭はいなさそう。

写真は、オオゴマダラの幼虫(マダラ蝶科)

2023年03月05日



28. シロチョウ科 キチョウ ツマベニチョウ タテハチョウ科 リュウキュウミス

ジ イシガケチョウ

シロチョウ科もたくさんいそうだが、私が識別できるのは、キチョウとツマベニチョウだけだ。二つとも、他にはない色をしているからだ。とくにツマベニチョウは、羽先の朱色が目立つので、客人の関心を引く。私の好きな蝶の一つだ。

タテハチョウ科で、私が識別できるのは、リュウキュウミスジとイシガケチョウの二つだ。リュウキュウミスジは、年中いるといってよいだろう。わが庭でもっともポピュラーだ。小ぶりで、飛んだり跳ねたり、という感じで沢山飛び交っている。黒地に三筋（ミスジ）に連なった白い点が並ぶ。

イシガケチョウは、数年に一回見かけるぐらいで、珍しい部類に入る。でも特徴的な姿で印象深い。わが庭では長命草（ボタンボウフウ）に群がっているのを見たことがある。



本には、以上の他に、テングチョウ科、ジャノメチョウ科、セセリチョウ科、シジミチョウ科が掲載されている。これらのなかにも、わが庭にいる蝶があるだろうが、私は識別認知していないものがほとんどだ。比較的地味なものが多いためだろうか。そのなかで、ウラナミシジミは、よく見かけるものだ。

蛾の仲間も多い。飛ぶのは夜なので、日常的に接することはない。草木にいる幼虫やさなぎを見ることが多い。幼虫やさなぎの段階で蝶と蛾を区別することは私にはできない。美しい幼虫・さなぎなのできっと蝶だろうと思って観察を続けていたが、羽化して蛾とわかってがっかりしたこともある。

写真は、クモの巣にひっかかったリュウキュウアサギマダラ。バタバタしていたが、主のクモがないので、私が放してあげたら、飛んで行った。

2023年03月11日

29. 屋内の動物 アリ ヤモリ クモ

自然の中の我が家なので、動物が屋内にもいろいろといる。代表はヤモリ。あちこちにいるので、猫が室内遊びの対象にすることも多い。室内で産卵することも多い。困ったことに電気機器内部に侵

入し、基板をこわすこともしばしばだ。可愛らしく鳴くヤモリも多い。夏の夜、窓の外に、照明につられて集まる虫を食事するヤモリも多い。一つの窓に5匹ぐらいが群がって、虫争奪戦をすることもあ



る。
アリ 梅雨など湿気が高い時、侵入してくるのがアリだ。侵入どころか、家の中のどこかに巣をつくることさえある。最近、我が家の湿気対策が進んできたので、ようやく見かけることが激減している。

侵入してくるアリの主食にするクモ（写真）もよくいる。室内で棲息しているようだが、アリが減った最近では、クモも減ったようだ。

屋外から時々侵入するものとして、ゴキブリやネズミがいる。屋外の草むらなどに棲んでいるゴキブリが、開いている窓から侵入してくることもある。ネズミも侵入してくることがあったが、足にねばねばをくっつけて動かなくさせるネズミ駆除具を活用したこともある。ある時、網戸を食いちぎって侵入してきたこともある。でも、対策を徹底したので、このごろはいない。ところが、最近、猫が、捕らえてきたネズミを遊具にして、部屋のなかに放つことがある。猫は飽きてくると、そのまま放置するので、2、3日、室内にいたことさえある。最近では、猫が連れてきたら早めに、私が取り上げて、森に返すこともする。5月～11月ごろに多い。

虫嫌いの人は、このあたりには住めないと思う。虫のいない都会への逃亡となりそうだが、私から見れば、そこは「生き物のいない無機質な世界」であり、私には耐えられない世界だ。

2023年03月17日

30. 処分して、今はないもの1 ガジマル 金煌マンゴー

そろそろ、この連載も区切りをつけなくてはならない。そこで「処分して、今はないもの」を思い出して綴ろう。まず樹木の話だ。大きくなりすぎ、そのまま伸ばしていくと、私の手に負えないことになりそうなものとして、5年ほど前に伐採したガジマルと金煌マンゴーがある。

ガジマルは、この敷地を購入するころに、敷地端の岩の隙間に、1cmくらいの幼苗を見つけたことから始まり、そのまま伸ばし続けた。1年に40～50cmは大きくなる。そのうち、気根が垂れ下がってくる。5年くらいから立派なガジマルとなってくる。何か神々しささえ漂ってくるので、拝みたくもなる。

でも、繁茂し過ぎ始めたので、剪定などの手入れが結構必要になる。10年を越して、高さも5メートル近くなると、私も70歳代に入り、今後のことを考えてしまう。ということで、伐採した。チェーンソーで、一か月くらいかかる作業になった。

大きな切り株が残り、そこに板を載せて、ベンチにしようとしたが、高さが60cmほどで、ベンチ役にはならなかった。いまでも残っているが。その脇からは、ゲッキツが伸びてきている。そして、



切り株に接するように大型のオオタニワタリ株を移植した。

金煌マンゴーは、土地の前所有者が植えておいたものだ。だから、私たちが住み始めた頃には、すでに樹齢10年ほどだったろう。このあたりで栽培されてよく見かけるアップルマンゴーやキーツマンゴーとは異なる。大きな果実が6～7月に緑色のまま熟す。他に見かけたことが一度もない種だったので、詳しい人に聞いたり、インターネットで調べたりして、管理方法を知る。通常のマンゴーに必要なビニールハウスなどは不要だとの事。

私が管理し始めて数年後に、初めて実を付けた。他のマンゴーに負けない美味しさである。しばらくしたある年、大きな実が300個近くたわわについた。たくさんの人におすそ分けした。翌年は隔年現象でダメだったが、次の年は再び豊作、だが、台風で見事にやられてしまう。こんな繰り返しで、苦勞する。そのうち、巨樹化していき、幹回りは1m近くなり、周辺の日陰が拡大していく。高さが3メートルを越した果実は、収穫もうまくはいかない。

ということで、思い切って伐採する。一か月近い作業だった。伐採後、周りに大きな明るい空間ができ、多くの植物が「待ってました」とばかり成長し始めた。

写真は本文にかかわりなく、バンシルーの枝で見つけた大型カエル ここではめったに見ない。

2023年03月23日

31. 処分して、今はないもの2 ユーカリ クルチ数本 ビワ ミフクラシギ 芝生

(前回の続き)

ユーカリ 2022年、植え付け後数年経過したが、風で傾いた。高さ6mになっていたが、幹の途中の2メートル余りの所で切る。新しい枝が出てくると予想したが、そのまま枯れてしまった。

クルチ 前所有者が庭のあちこちに十数本植えたものだ。多すぎるので、本数を絞るため、根元で、あるいは幹の途中で切る。途中で切ったものは、しばらくすると、新枝が沢山出てくる。そして、丸か平らな樹形をつくる。それなりに美しいので、多少樹形を整える作業をしているが、上には伸びないようにしている。それが現在6本。根元から切ったものは、数年で枯れてくれた。これが数本。現在は3本を切らないで伸ばしているの、5～7mの高さになっている。

ビワは、たくさん収穫してきた。栄養不足のためか、木が弱ってきて、半枯れ状態になった。周り

の樹木との競合も激しいので、伐採した。

ミフクラシギ（オキナワキョウチクトウ） 毒をもっているの、「目をふくらす」という名前がついている。玄関脇で存在感があったし、花も美しかった。でも、毒が多いから注意しろ、ということなので、伐採した。隣にあったミルクブッシュが大きく伸びてきた。皮肉なことに、これまた毒がある。切るのは可愛そうなので、そのまま伸ばしている。

コーヒーノキは、苦勞して大きくし、それなりの収穫があったが、自家消費用には、現状の数倍必要だ。それに、収穫した豆をコーヒーにするまでの手間暇をかけるほどのエネルギーが、私たちに残されていないので、縮小方向だ。幼木はすべて切り取った。成木も2本を伐採した。残った一本は、記念木として残すかもしれない。

芝生 庭の中心部分には、最初芝生を植えたが、管理が大変な割には、うまくいかない。下ごしらえもしないで、植えただけだったので、やむをえない。跡はいろいろなものを植え、グランドカバーとしてはタマリユウを育てている。

2023年03月29日

3.2. 殖しているもの

連載の最後は、いまもなお、増殖させているものを紹介しよう。

その最大は、千年木だ。一本の挿し木から始まった。現在では数百本になっている。高く伸びすぎて、元気がなくなってきたものなどを切って、挿し木に使っている。垣根風に使うので、まだまだ植えられる。

クロトンやソングオブインディアも千年木同様だ。最近では、シェフレラ（ホンコンカポック）もそうしている。こぼれ種で新苗を出すサンダンカも、何か所かで植えているが、もう一杯に近づいてきた。

ラクティアやリュウゼツランも、殖やしていたが、もう植える場がなくなってきた。

ペペロミア・ナヌス・モンテスラなどの観葉植物も挿し木で殖やしている。自生しているヤリノホクリハランも、根を取って移植し、あちこちに増やしている。オリズルランは、飛び出してきたランナーから葉と根ができたものを移植している。

大きくなった樹木がつくる日陰をそうしたもので覆っているのだ。



樹木の類で、数年前までに植えた、メラレウカ3本、シークワサー、レモン、ユズなどは、しっかり成長することを期待している。

写真はソテツの新葉

自然と人間、そして私（30回連載）

2019年01月03日

1. 自然のなかの人間 日常出会う動物

人間は、自然のなかで生きているが、それだけでなく人間自身も自然であり、自然の一部だ。その一方で、人間は自然に対抗して「人工」的なものを作り、そこで生きてきた。都市が典型であり、住宅だってそうだし、食事だってほとんどがそうだ。衣類もそうだ。義肢、入れ歯などもそうだろう。なかには、自然と人工を対立させて、「自然を克服する・征服する」という発想も生まれ広がった。

しかし、近年では、その発想を見直す動きも生まれ広がっている。自然とともに、自然に合わせて生きるといった具合に、だ。自然破壊に対抗して自然を守ろうとする環境保護の考えもそうだろう。田舎暮らし願望もその一つだろう。

そこで、自然と人間について考えていこうと思う。その際、私自身がどうなのか、ということに合わせて書いていくつもりなので、タイトルを「自然と人間、そして私」とした。

自然といっても広いが、まずは動植物といった生物、そして空海山太陽といったものから始めよう。そして、景観・気候、そして農業など自然に直結した産業、さらには自然科学、そして自然観・スピリチュアリティ・信仰、自然との出会い、暦・時間といったものへと広げて考えていきたい。

ただ、きちんとした計画があるわけではなく、随想風に書いていくつもりなので、どんな風に進行するかは、「自然の流れと私の気分任せ」になるだろう。

最初は、私の日常生活周辺で出会う動物について書いていこう。

並べてみよう。

犬。猫。牛。豚。コウモリ。ねずみ。

ハブ。アーマン（オカヤドカリ）。ヤドカリ。

※ アーマンはありふれた動物で、我が敷地にも数匹以上棲息している。数年前に、三匹による15分間にわたりヤド争奪戦を目撃し、ブログ記事にした。このアーマンがなぜか特別天然記念物なのだ。

カラス。ツミ。スーサー（イソヒヨドリ）、ハト、シロガシラ。メジロ。チドリ。サギ。

メダカ。グッピー。ボラ。ナマコ。ヒトデ。蛙。

クモ。ヤモリ。カマキリ。蝶。トンボ。蜂。アリ。蚊。ゴキブリ

私が名前を知っているものだけで、100を超すかもしれない。私が日常生活を送っている場所が海岸近くの「森の中」だからとも言えそうだからだろう。

さあ、今回は何から始めようかな。

2019年01月10日

2. 動物を「分類」する ペット 犬猫

前回書き並べた動物は、人間生活から見て、いろいろと分類することができる。

まず歓迎するもので、飼育さえするものとしてペットや家畜などがある。私が飼育しているペットは、グッピーとメダカだ。過去を振り返ると、犬を飼った期間が一番長い。他に20歳代前半に文鳥を飼っていたこともあるが、「手乗り」を楽しんでいるうちに逃げられた。

犬派、猫派とテレビなどでよく話題にされるが、私は完璧に犬派だ。そのわけは、私が成年であることもあるが、幼児期から家に犬がいたことが大きい。番犬でもあるが、田畑に出かけるときに、重いものを運ぶリアカーを引っ張る役目もしていた。そのころの実家には、他にモルモット、十姉妹、セキセイインコがいた記憶だ。農村地帯だったので、動物とは親しみのある環境だった。

西原や愛知に住んでいたころにも、犬を飼っていた。西原に住んでいた1980年代は、近所のあちこちで飼い犬が遊んでおり、放し飼いが多かった。犬の後始末を人間がする時代ではなかった。我が家の犬は、大里の動物センターでもらい受け「タロー」と名付けていた。ハブが出そうなところを散策する時に連れていたが、犬が見つかるより先に私が見つけて、犬にハブと対応するように躡けようとしたが、成功しなかった。愛知に住んでいたのも森に近く、マムシが多くて、マムシに対応するように犬を躡けようとしたが、成功しなかった。ヒキガエルには攻撃をしかけて、相手を囓んだら、毒がまわって失神した。

愛知時代の犬は、血統書付きの柴犬で、秋田からきた。ベニと名付けて可愛がっていた。私がカナダは海外研究に出かける直前に病死した。恵美子は「飼い主がいなくなるのを感じていたのだろう」という。

犬が蛇に対抗しようとしないう話を知人としていたら、猫が有効だと聞いた。ある人などは、飼っていた鶏を襲おうとしていたハブを猫が退治してくれたとのこと。

ということで、我が家周辺をうろついている猫を手なづけようとしてきた。時々餌をあげるが、なつかない。餌を食べるだけだ。ある時は、「早く餌を寄せ」と猫パンチをしてきた。だから、この猫とはつかずはなれずだ。この猫は、私に対して警戒心をゆるめないが、そのくせ、「餌を寄せ」と私を見つめる。だから飼い猫にすることができない。自由気ままにやってきては消える。でも、それぐらいが「ハブ除け」効果に適切なものかもしれない。この猫が出入りして以降、ハブが出現していないからだ。

私は、どうも猫が好きになれない。おそらく、コミュニケーションが取れないからだと思う。犬は、すぐに反応する。それだけに、対応に優しさ・丁寧さが必要だ。ここ20年犬を飼っていないのは、留守にした時の対応を考えてしまうからだ。でも、留守にすることが稀になってきたこのごろ、

時々「犬を飼いたいな」と思うことがある。

最近では、ペットに癒し効果を求める人が多い。番犬効果などを大きく引き離しているようだ。

癒し効果のペット飼いの激増は、ペット過剰の時代、あるいはペットの過剰人間化とでも言えそうな感じもする。ペットを、自然と隔離して人間界に入れ込ませるような感じだ。

私が、メダカやグッピーを池で育てているのは、水槽育てのように、「抱えこむ」のとは異なり、自然とのつながりを増やす方向で育てたいと思うからだ。でも池育てはとても苦勞する。水槽育ての方がはるかに簡単であることを、近頃つくづく感じる。

こんな時、「人間が自然とつながる媒介としてのペット」というとらえかたをしてみるのも面白いと思うようになった。



写真は、敷地西南端岩上の長命草の花で吸蜜するイシガケチョウ

2019年01月17日

3. 共存する動物 鳥 蝶

次は、飼っているわけではないが、肯定的な意味で、私達の日常生活にかかわりの深い動物だ。いってみれば、「適切な距離をとって共存するもの」だ。簡単にいうと、有益な動物だ。あるいは有益とまでいうわけではないが、私達に幸せ感や癒しの気持ちをもたらせてくれるものだ。

まず鳥でいうと、我がベランダに頻繁に来るものとしてスーサー（イソヒヨドリ）、スズメ、ハトがいる。しかし、スズメは、数年前に姿を消した。ベランダだけでなく、周辺地域全体からいなくなった。代わりにカラスが登場した。カラスに追い払われたのだろうか。

スーサー（イソヒヨドリ）は、毎日のように現れる。私達が住み始めたころ、毎日現れるカップルに、ブンタとユンタと名をつけた。いってみれば、我が家の先住動物だ。我が家近くに巣をつくり、子育てもした。家族でやってくる時もある。その後も、推理だが、ブンタとユンタの子や孫が引き続き、ベランダ訪問をしている。ベランダから遠くの家族？に向けて大きな鳴き声で呼びかける声がよく聞かれる。なぜだかオスの体色が美しい。スーサーが庭の池で水浴びをする姿を見ることもある。

ハトもよくあらわれる。ハトがくると、スーサーは遠慮するしかない。ハトは、ベランダの手すりが好きだ。手すりにのったカップルが愛情交換、ときには交尾までなさる。ハトは私たちが近づいても動かないことが多い。ベランダのバケツの水を飲むこともしばしばだ。

敷地内に子育ての巣をつくるのは、スーサーの他にメジロだ。毎年、巣立ちが終わった夏に、空に

なった巣を発見することが多い。

昆虫でいうと、まず蝶。野菜などの授粉をしてくれるのでありがたいが、美しさがなんとも言えない。日常的に見かけるものとして、シロオビアゲハ、アオスジアゲハ、リュウキュウミスジ、アサギマダラ（多分リュウキュウアサギマダラ）、オオゴマダラ、ツマベニチョウなどの大型蝶がいる。他にも、十種類以上見かける。オオゴマダラの食草のホウライカガミは植えて10年以上になり、立派になってきているが、オオゴマダラがたくさん住むほどには至っていない。我が敷地内だけでなく、隣の森にもたくさんの蝶が来る。

授粉ということで活躍するのは蜂。近くに養蜂をしている人がいるので、そこから蜜集めにやってくるミツバチも多い。

庭に池を作ってからトンボも多いが、トンボの幼虫のヤゴがメダカの卵や幼魚を食べるので、我が家では、有益よりも有害のほうに分類していいかもしれない。

2019年01月24日

4. (続) 共存する動物 クモ ヤモリ

蚊やアリなどの困りものを食べるので「有益」なものとして、室内クモとヤモリがいる。クモは、巣を張らないで、室内でアリを捕まえる。数センチ以上と結構大きいので、最初は驚いたが、慣れてきた。室内に大量に侵入するアリを食べてくれる。ヤモリは、キッキッと鳴くタイプのものだ。かわいい顔をしている。窓の外側に来て、室内の明かりに引き寄せられる小さな虫をどんどん食べる。一枚の窓ガラスに数匹のヤモリが集まって、虫争奪戦を演じるが、それを室内から観察するのも興味深い。

屋外のクモで、圧倒的な存在はオオジョロウグモだ。日本最大のクモの一つだ。6月ごろから、庭畑のあちこちに巣を張り始める。そのころは小さいが、10月ごろには、体長が10センチを超す。初めて見る人は驚いて、後ずさりしてしまう。慣れた私でも、他に気をとられて、過剰接近したり、クモの巣に引っかかったりしたとき、今でも驚くことがある。

オオジョロウグモは、巣にかかった鳥さえ食べるといわれるが、実際に見たことはない。ある時、カマキリと、オオジョロウグモが戦っていた。その時はカマキリが勝ったようだった(2013年8月24日記事 写真アリ)。巨大なのはメスで、オスはとても小さくて、知らない人は赤ちゃんだと思ってしまう。しかも、メスのクモの巣に、数匹以上住んでいる。2018年9月8日の記事では、一匹のメスに25匹のオスがいることを書いた。

次は、「棲み分けするか、排除退治する」動物だ。それは、一口でいって、有害だからだ。たとえば、収穫期に入ったレタスなどを見事に食べるタイワンシロガシラ。10年以上前に、レタスが立派に育ったので、収穫しようと思った時、レタスが、包丁で切ったように、見事に上半分を食べられ



た。でも、防ぎようがない。食べられる前に収穫することが一番だ。

苗を食べてしまうカタツムリも困る。でも、農薬を使わないので、放置するか、一つ一つ取るしかない。それで、食べられやすい時期を外すとか、害を避ける作戦にでる。

我が家の最大の悩みは、アリである。森の中に住んでいるので、けた違いに多いのだ。しかも、住宅内に侵入してくる。何万匹といったアリが、住宅内のあちこちに侵入してくるだけでなく、家の中のどこかに住み着いて

しまっている。大量発生した時は、いろいろな作戦を展開して、いなくなる時期まで耐えるしかないというのが実情だ。

もう一つは、ネズミ。ある時などは、網戸を食い破って穴をあけて、侵入してきた。これまた、くりかえし戦ってきた。徐々に減ってきてはいる。

ゴキブリは、多くないが、外から飛んでくる。これには、ベチパーがきくというので、畑のベチパーを多少乾燥させて、出そうなところに置いている。ベチパーの匂いが、嫌いなのだそうだ。

余談だが、衣装箱に市販の防虫剤を入れていたころ、私の体にかぶれが出やすかった。防虫剤が猛毒だということを知ってやめた。その代わりに、畑にある、ベチパー、フーチバー（ヨモギ）、セージ、月桃を刻んで、数日間乾燥させて、袋に入れて衣装箱に入れている。これをしてから10年以上になるが、衣類の虫被害はゼロだ。

写真は本文にかかわりなく、庭のリウキュウミスジ

2019年01月31日

5. 有害有益の二分論を過剰にはしない 消えた動物 マングース アカマタ

有益・有害ということで、動物の話をしてきたが、この二分論が過剰になってはまずい。有害でもあり有益でもあるとか、益か害かについてのファジーなグラデーション（スペクトラム）があるという見方が必要だろう。そして、いずれにしても人間の都合での判断であることを忘れてはならない。

たとえば、さし草はズボンにひつつくので、いやがられるし、繁殖力旺盛で草刈りを面倒にさせるものだが、戦後食糧難の時の食材になっただけでなく、ここ10年、そばなど食材として活用されている。

雑草と思われているものに薬用効果のあるものが多い。私は自生のものに加えて苗を植えて薬草を

育て、薬用茶や薬用酒を作っている。ドクダミ、クミスクチン、ビワの葉、バンシルーの葉、月桃の葉、月桃の種、ハママーチ、フーチバー、長命草、桑の葉・・・

そして、毒をもつ植物の一つホウライカガミは、オオゴマダラの食草なので、庭に植えてオオゴマダラを呼び寄せようとしている人は多い。私もその一人だ。

14年以上前に、ここに住み始めたところに見かけたが、それ以降消えた動物がいる。

まずマングース。ある時、仕事をしている部屋の窓の外側で、私をじっと観察していた。私がではなくて、マングースが私を観察していたのだ。それを私が観察した。両手を抱えて立ち上がっている。リスがする動作と同じだ。実に可愛い。ついでにいうと、コウモリも同じような顔をしている。写真で見るオゴジョも似ている。

かなり以前に、ハブ対策として導入された外来動物だ。見世物としてハブと戦わせれば勝つが、日常的にハブを攻撃しているのでもなさそうだ。それよりも、山原の森でヤンバルクイナたちの脅威になっているというので、駆除策が進められている。そのためか、このあたりでも激減した。たまたま道路を車で走っている時に遭遇するぐらいだ。10年ぐらい前までは、わが庭畑でもしばしば遭遇した。

数年前から見ないものとして、スズメがある。ベランダで数羽が戯れるのは日常なことだったが、カラスの出現と対照的なので、カラスのせいかと思っている。

アカマタは、住み始めた時、そして、その3～4年後に出会った。攻撃的で、怖い。最初の時は、たまたま、作業中の電気屋さんが早速対応してくれた。

でも、アカマタは、退治してはいけないといわれている。祈りの対象にさえなる。ハブよりも強いので、ハブ対策にもなるようだ。2回目の時は、朝起きて畑を見回っていると、網にからまって死んでしまったアカマタを見つけた。網は、畑の隅に一時保管していたものだ。自分で入り込んで、脱出しようともがいて逆に絡まり過ぎて息絶えたようだ。

2019年02月08日

6. 現われた動物 カラス トンボ ハブ

前回（1月31日記事）「消えた動物」を話題にしたが、ここに住み始めた頃居なかったが、その後現れた動物もいる。その代表はカラスだ。カラス対策に詳しい人の話だと、餌がこのあたりでも見つけられるようになったからだろう。わかりやすく言うと、都市的生活が浸透しているのだろう。このあたりで以前にも見られたのは畜舎の周りだったそうだ。

カラスがくる以前は、猛禽類のツミが頂点にいた。ツミという名前は、最近の新聞記事で知ったものだ。近隣の方は、ハヤブサといていたが、正確にはわからなかった。鳴き声が判断資料になるよ



うだ。それにしても可哀そうな名前だ。ツミは、近所の電柱のてっぺんにとまって、あたりを見回していた。

そこにカラスの群れがあらわれたのだ。一度、カラスとツミが戦っているのを見たことがある。カラスは群れなので、1～2羽のツミにたいして優勢に戦っている印象だった。

カラスがくると、我が家周辺のコウモリが警戒し始めた。でも、カラスは夕方どこかに帰り、コウモリは夕方にあらわれるので、時間差が多少はある。でも、カラスが他の鳥を追いかけることも多い。

カラスは、以前から好きになれないが、いまでもそうだ。

次にトンボ。もともといないことはないのだが、わが庭に池を作って以降、大幅に増えた。池を作って最初に表れたのは、蛙・オタマジャクシだ。そのうち、いろいろな水辺の昆虫が表れるようになったが、中心はトンボだ。いくつもの種類が現れる。結構美しい。つがいで飛ぶことも多いし、交尾したまま飛ぶことさえある。

トンボで困るのは、水草に産卵し、卵がヤゴになって、池のなかに長期に住むことだ。メダカを食べるのだ。だから、メダカが殖えない。

池には、他にオカヤドカリや大型のカニが現れる。

ここで、ハブについて書いておこう。我が家周辺のハブには、ヒメハブとハブがいる。圧倒的にヒメハブが多い。ヒメハブとの遭遇は年一回ぐらいだったが、ここ3～4年はない。畑の岩をとりだすと、そこに隠れたりしていて驚く。「しばらく待ってなさい」といって、農業用の鉄パイプをとってきて、ヒメハブの頭をたたく。こんな風な対応を3度した。

ヒメハブは50センチぐらいで小さいが、ハブは1メートルを越す。ある時、夜8時ごろ、我が家駐車場の車の横を通る。早速退治しようとしたら、恵美子が「やめて、逃がしなさい」といって、止めている間に、隣の森に消えた。その時に隣人がハブ捕獲道具をもって現れたが遅かった。生きたハブとの出会いは、この地ではこれだけだ。

6、7年前、沖縄県ハブセンターが我が中山区長に、「中山でハブが出そうなところ」を尋ねて、我が家が紹介された。太い針金で作った格子に、漁網をからませて、ハブが出そうな箇所に設置するというものだ。最初の3年ぐらいは効果ゼロだった。3年ぐらい前、1月から4月にかけて、立て続けに3匹が引っ掛かった。ハブが通れるぐらいの網目だが、途中の太い腹は通れずに、捕獲されることになる。夜中にひっかかり、朝気づくのだが、その時は息が切れている。

その効果があっただけか、ヒメハブがいなくなったのだろうか。ここしばらく出会っていない。野良猫の通り道になっているのも効果ありと思っている。

2019年02月14日

7. いっしょに棲む動物

自然と共生する日常生活のなかで重要なものとして、動物との共生がある。くだけていうと、「いっしょに棲む動物」だ。飼育とか特別の保護（動物園 ペット）のなかではなく、私達人間の日常生活と接しての生活だ。無論、排除しようとしている動物もいる。アリ・ネズミ・ハブだ。

共生の一つとして、野鳥がいる。一度、ベランダで小鳥に餌をやろうとしたが、小鳥は来ずに、ハトがきたので、餌やりはやめた。

今はきていないが、来たら餌をあげていた野良猫がいた。身体接触はなかった。食べる量から推察すると、我が家の餌が中心ではないようで、どこでどのように食料を確保しているのかは不明だった。もしかすると、どこかの飼い猫かもしれない。

10年近く前、我が家の床下に、まだ目が見えない子猫数匹といっしょの母猫が来たことがある。私に見つかったためか、一日で、全員がどこかへと移っていった。

迷い犬が我が庭で倒れた。病気かなにかだろう。役所に連絡して引き取っていただいた。

昆虫などの観察も楽しい。蝶は10種類以上登場する。アゲハやマダラなど大型が多いので、楽しい。食草との組み合わせを推理するのもいい。トンボや蛙の種類も多い。池をつくったことの影響は大きい。

アーマン（オカヤドカリ）は、以前からいたが、池を作って以降、水を飲みに来ることが多い。池から出られなくなって救出することもある。大型カニもそうだ。アーマンは近づくと、殻のなかに閉じこもって動かない。

ヤモリ、カマキリ、オオジョロウグモ、ナナフシなどの昆虫類も多い。私が接近しても、よほどことがない限り逃げない。カマキリなどは威嚇してくる。

こんな動物たちの中で、3階ベランダまでどうやって来たのかと不思議に思うようなものもある。ヤマガカシ（アカマタかもしれない）がそうだし、10センチ近いアマガエルもそうだ。こんな我が家だから、虫嫌い・動物嫌いの来客には災難のようだ。

写真は庭のオオゴマダラ 大接近



2019年02月21日

8. 自然と人間との共同制作としての庭

庭というと、京都の庭園をイメージする人が多い。竜安寺石庭とか小堀遠州とか石川丈山が設計したものが代表例だ。盆栽を大きくしたような庭といえるかもしれない。あるいは、イングリッシュ・ガーデンなどをイメージする人も多い。南城市で行われるオープン・ガーデンでも、和風・洋風といって、このいずれかが多い。そうでなく、ナチュラル・ガーデンというのもあるが、それほどナチュラルではなく、かなり人の手が入ったものが多い。他には、花中心、多肉植物中心の庭もある。

花などを美しく飾った公共庭園なども、大量のポットに仕込んだ花を並べているものが結構ある。一年草の花を種苗から育てて立派にするには、かなりの手間と時間がかかるから簡略にするのは仕方がないだろう。

それらと比べると、我が家のものはナチュラルにふさわしいと思う。それにしても、手入れ作業を結構やっている。一日平均で1～2時間というところだ。

立派な庭園から我が家の庭まで含めていずれにしろ、庭は人間の手を通して作り出した自然という言い方ができよう。人間の手の入れ方の程度に、大きな違いがあるだけだともいえよう。あるいは、自然と人間との共同制作とっていいかもしれない。

そういうと、田畑などもそうだし、里山もそうだ。隣の景観を借景として活用する庭づくりもそうだ。そういう一例として、テレビで放映されたのだが、大津にある写真家今森光彦さんの庭は魅力的だ。

そういう庭では、自然（植物）と庭の作り手との対話が見えてくる。と同時に、庭を通して人々のつながりも見えてくる。それは単なる鑑賞としての庭を超えるものといえるかもしれない。

その意味では、「動植物を招く庭」「人々を招く庭」というものがある。そして、庭で一緒にすることを通して、集う人々のつながりが広がるという風にしたいたいものだ。スケッチ・写真・お茶・野鳥観察・昆虫観察などはいい。庭に流れる（溢れる）空気が、集う人々の心のつながりをも生み出すだろう。そして、物語が生まれ広がっていく。そんな機会として、記念植樹、草取り、薬草採取などがあってよい。

普通は、人間が庭をつくり、人間が植物を加工すると考えるのだが、逆に、植物が庭をつくると考える。さらに、植物そして庭が人間を加工し、人間を育てると考えるのも面白い。

庭の植物の生長繁殖が、人間に新しい創造発見を生みだし、人間を育てていくのだ。

その点で、自生する植物が作り出す生態サイクルが、そこに居る人間の生態サイクルをつくることであろう。だから、庭に自生する植物、集う動物には関心がひきつけられる。わが庭でいうと、オオタニワタリ、リュウキュウコスミレ、サンニン、フーチバー、ケイトウなどが魅力的だ。なかには、他の植物の生育環境を狭めるので、ガジマルのように除去しなくてはならないものもある。

2019年02月28日

9. 果物育て1 在来種 酸性土

わが庭畑には果樹をけっこう沢山植えた。育て方を教えてもらったり、本で学んだりしたが、無手勝流でやってきたことの方が多いただろう。だから、失敗の方が多いただろう。採算を考えない趣味の園芸だからできることだ。果樹はまさに自然と人間との共同の物語だ。そして、我が畑の果樹は私自身の物語でもある。

その体験を書き連ねていこう。

1) 在来種が育てやすいはずだが、振り返ってみると意外に少ない。代表的なものとして、パパイヤ、バナナ、シーカーサーなど。他に、ヤマモモ、リュウキュウバライチゴも試みたが、失敗。

近隣でよく見かけるものなので、作りやすいと思うのだが、意外に上手くいかないことが多かった。パパイヤでいうと、成功率10%以下だろう。買ってきた苗よりも、野菜くずから芽を出したもののほうが成功率は高いが、それでも成功率10%を超すだろうか。上手くいったと思ったら、雄だったり、台風にやられたり、原因不明で倒れたりする。でも、時々、立派に育つこともある。その意外性を喜ぶというわけだ。

近所の畑で栽培しているのを見ても、成功率50%内外で、素人の私がやるのだからと、自分で慰めている。

2) 土が重要なのはいうまでもない。肥沃かどうか、砂質か粘土質かなどということもあるが、酸性かアルカリ性かが、最大の決め手になることが多い。この地は、ジャーガル質でアルカリ性だ。だから、国頭マージの北部でよく育つものは難しいことがある。アルカリ性の土というのは、日本ではめったにない土なので、むしろ、この土地に合うものの方が少ないといってよいくらいだ。

だから酸性を好むもの場合は、鹿沼土やピートモスなど酸性が強いものを入れて植える。あるいはそれらを主体にした鉢に植える。

それでできめに成功したのは、コーヒーだ。コーヒーは果物とは言いにくい。鹿沼土やピートモスを中心の土に植え替えたなら、劇的に元気よくなり、実もつけ始めた。といっても、実をつけているのは現在3本で、コーヒー自給率は2～3%だ。さらに今、こぼれた実から発芽したものを数本を植えている。そして、挿し木を一本育て始めた。それら全体を合わせて何年かすると、自給率50%を超すだろうかと、捕らぬ狸の皮算用をしている。

他に、ジャボチカバは、鹿沼土を中心にした鉢で育てている。他にも、アボガド、ブルーベリーなども鉢植えでやったが、成功したことはない。

ライチも酸性を好むので、根元に鹿沼土やピートモスを置いている。その効果なのかどうかははっきりしないが、一応収穫できている。隔年現象はあるが。

2019年03月07日

10. 果物育て2 マンゴー 日当たり 剪定

(前回の続き)

3) 店頭に並ぶような美味しくて食べたくなるもの、たとえばマンゴーは難しい。プロ農家がおおいに苦労して育てて販売にまでいきついているものを、素人が上手くいくことは、最高の「運」というしかないだろう。普通のアップルマンゴーだと、雨除けもあってビニールハウスをつくり、中に授粉のための虫を放つ。そして、剪定に精を出す。だから、管理が大変だ。後継者不足で断念する農家も見かける。

我が家の前所有者が植えた金煌マンゴーは、ビニールハウスが不要ということで、手入れができない私に合った種類だった。一度大量に収穫して、たくさんの人に差し上げた。その年の後も何度か収穫できたが、少なかった。今年こそはという年には、台風でほぼ全滅した。そのうち管理できないほどに巨大化し、まわりの植物の生育を妨害するほどになった。そして、毎年していた剪定も、年を経るにしたがって、私の身体では不能になることが目に見えてきたので、2018年ついに切り倒した。大きな幹なので、根元から1メートルぐらいで切り倒し、そこを切り株ベンチにしようと目論んでいる。でも、そこにも新芽が出てきている。

4) 日当たりは重要

マンゴーを切り倒した後、日当たりがよくなった植物が生き生きし始めた。ライチなども大きくなると、日当たりが悪い枝には実がつかない。だから、剪定は欠かせない。

逆に、コーヒーのように日陰で育つものもあるので、配置を工夫する。

5) 剪定は重要

果物の本を見ると、剪定に割かれたページ数がとても多い。どれだけ収穫できるかは剪定にかかっているほどのものもある。木を痛めつけて、「子孫を残さなくては」と思わせるために剪定するものらしい。

剪定で苦労する一つは、ライチ。実のなる芽は、一年以上前についているので、剪定は1年以上前にする必要がある。といっても、素人の私にはよくわからないから、伸びすぎた枝について、木全体の半分だけ、交互に剪定している。収穫は一年おきにできるという隔年現象があるので、木ごとに剪定する年を交互にしてもいる。現在3本あるので、おかげで、毎年1~2本で収穫を楽しんでいる。

10年近く前に植えたインドナツメが大きくなり、花を咲かせ、2017年には数個の実をつけた。2018年は、実が見当たらなかったもので、1月終わりに剪定したら、隠れていた実がいくつもできた。食べてみると、結構いける。これはいい、と喜んだ。

本には、強い剪定を4月にすると書かれているので、高さ2メートル足らずの所で大胆な剪定をした。2018年の夏には盛んに開花したので、期待していたが、10月の台風で、花や蕾が飛ばされてしまい、2019年春の収穫は期待できそうにない。

剪定のもう一つの理由は、収穫など管理をしやすくするためだ。2メートルを越すと、脚立を使って

も、収穫は大変だ。数年前、ライチの収穫の際、枝に登ったが、梅雨時の雨で、足を滑らせ、整骨院で手当をしてもらったことがある。それ以降、できる限り樹高2メートル以下に抑えている。

ビワもそうで、枝を水平に広げている。中心幹を切る摘芯をしたが、ビワはさらに摘蕾・摘果も必要だ。袋掛けもしたが、袋を破って鳥が食べにくる。

2019年03月14日

1 1. 授粉 苦戦話 果物育て3

6) 授粉

果樹には授粉が不可欠だが、そこで苦労するものがある。通常は、虫が授粉してくれる。でも、それだけでは不十分なので、人工授粉させなくてはならないものもある。パッションフルーツは、我が家でたくさん収穫するが、毎日午後3時ごろ、筆か耳かきなどでの授粉作業が欠かせない。

パッションフルーツによっては、別の種類の間での授粉が必要なものもある。これは、まだ成功していない。パッションフルーツは、紫色や黄色が多いが、それ以外のものもあり、異種間人工授粉が必要だと、苗店で教えられたので、試してみようと思っている。

同じように、ブルーベリー、ホワイトサポテ、グアバは、異種間授粉が必要とのことだ。ブルーベリーは数種類やってみたが、苗そのものがうまく育たないので、あきらめ気味の現在だ。ホワイトサポテは、高さに2メートルになる木があるが、複数種必要というので、昨年、もう一本植えてみた。うまくいくことを願っている。グアバは試したことがない。

7) 苦戦話

以上の他にも、いろいろと手がかかるものがある。たとえば、マンゴーのようにビニールハウスが必要なものがあるが、マンゴー育ては断念の方向だ。

パッションフルーツのように、つるで伸びるもののために、畑にロープを張る必要があるものがある。

収穫時期になって、虫や鳥に先に食べられてしまうものがある。食べられる直前に収穫しなくてはならない。といっても、早く収穫するとおいしくない。

毎年激しい取り合いになるのが、ライチとビワだ。

果樹本体が虫にやられてしまうこともある。カミキリムシにやられたシークワーサーが代表例だ。収穫できるほど大きくなったときにやられてしまった。近隣の農家の話だと、昭和30年代に、このあたりでもシークワーサーを栽培していたが、カミキリムシにやられて栽培を断念したことがあったそうだ。

台風の際の潮風でやられてしまうものもある。数年間育てて、ようやく収穫かと思った今年、潮風でダメになったレモンがある。

台風の風で倒されるのはバナナ。3年ぐらい前、台風で倒れたものをそのまま埋めたら、そこから育

って、収穫したという例もある。

豊作だった翌年は不作だという隔年現象を示すものも多い。ピタンガがそうだ。ピタンガとアセローラはそっくりだが、アセローラは酸っぱすぎてダメだという人もいる。

カニステル（エッグトリー）が苦手な人もいるが、我が家では、年々収穫が増えている。

肥料をどうするか、という点はよくわからないことが多い。一応、油粕などを混合した固形有機肥料とか牛糞鶏糞を混ぜた市販堆肥を与えている。たくさん与えているわけではなく、わが庭畑で出る枝葉などを根元に与えるのが中心だ。

2019年03月21日

12. 亜熱帯雨林の我が敷地内外の樹木

我が敷地を取り巻いているのは森だ。とくに東隣の墓地は約500坪の広大な敷地で、自然に近い状態が保たれ、亜熱帯雨林の様相を呈している。我が家の北方向には、広大な森があるが、そのミニ版といった感じだ。北方向の森は、グスクロードの下方になる。ヤンバルの森に近い状態だ。ガマがたくさんあり、沖縄戦時、ここに避難した住民は多い。

ここあたりの森とヤンバルの森との違いは、土にある。ヤンバルは国頭マージで酸性土。このあたりは、島尻マージまたはクチャ・ジャーガルでアルカリ性土だ。だから、ドングリを落とすシイ・カシ類、あるいはつつじ・椿類は育てるのが難しい。久米島でいただいた大きなドングリをつけるオキナワウラジロガシのドングリを、我が畑に植えてみたが、発芽して1メートルぐらいの高さまで伸びるが、それ以上は無理だった。ヒカゲヘゴも失敗した。

もし酸性土を好むものがあれば、鹿沼土やピートモスなどを入れる必要がある。我が家では、コーヒーをそうした方法で育てている。地植えから鉢に移植したジャボチカバもそうしている。

森で取り囲まれているわが庭畑には、隣の森に自生する樹木の種が飛来し発芽する。代表的なものは、ガジュマル、アカギ、ギンネムだ。ガジュマルなどは、屋根のようなところから芽を出し「こんなところにも育つのか」と驚くことがある。実を食べた鳥の糞のなかの種が発芽するようだ。他にも、わが庭畑で育っている自生種の樹木をあげると、オオバギ、チシャノキ、シャリンバイ、ゲッキツ、ソテツなどがある。

それらの樹木の中でも大きいものには、キジムナーが暮らしていそうだ。ガジュマルが代表だろう。我が家にはないが、隣の森に育っている大きな樹木を並べてみよう。

アコウ（ウスク）、ギョボク、ハゼノキ、クロヨナ、タブノキ、シマグワ、モクマオウ、カシワバゴムノキ。このあたりなら、加えてクワデーサーなどがあってもよいが、なぜか周辺にはない。海岸近くまで行くと、大きなユウナなどが目立つ。

ツルが巨大になって、他の木を締め殺しにするのは、オオイタビだ。ノアサガオも木をよじのぼって、木をおおい、いっぱいの花をつける。



これらの樹木の高さは、5～10メートル以上だ。おかげで、台風時の強風を和らげてくれる。

写真は、ブーゲンビリアの花

2019年03月28日

13. 我が敷地内の大きな樹木

数年前のブログ記事に、敷地内樹木の幹の太さを測り、大きなものを選んで掲載したことがある。その時のトップ群にはガジュマルと金煌マンゴーもあったが、両方とも大きくなり過ぎて管理できないので、切り倒した。

昨年切り倒す前に、外国からの来客が、わが庭畑を評して、ジャングルと名付けた。ガジュマルとマンゴーを切ってから、ようやくジャングルから庭畑に戻ったようだ。

現在のトップは、チシャノキ。だが、オオイタビの締め殺しに合い、今年の台風で枝が折れて低くなり、現在は7～8メートル。もう一本高かったのは、ブーゲンビリアだったが、これも剪定して、現在は6～7メートルだ。

この二つを追い越しそうな勢いなのは、2本のサガリバナ。5月末から年末まで、美しい花を夜8時ごろから朝まで咲かせる。



ヤシ類も高い。マニラヤシ、トックリヤシモドキ、アレカヤシ。高いだけでなく、姿が美しい。とくに、玄関への通路脇にあるトックリヤシモドキは、自慢の樹木だ。この樹を植えることは長年の夢だった。この家を立ててまもなく、苗木を見つけて植えた。当初は高さ1メートルぐらいだったが、現在は4メートルほどになっている。

他に3～5メートルの高さになっているものには、次のものがある。

ライチ3本

クルチ（リュウキュウコクタン）9本

この2種は、土地の前所有者が植えたが、以下は、私が植えたものだ。

ビワ2本 せっせと剪定して、2メートル余りに抑える作業を頻繁にしている。

タイワンレンギョウ（デュランタ）2本 美しい紫の花が印象的なので、今、挿し木で殖やすことに挑戦中。

キバナタイワンレンギョウ3本 台風で2度も幹が折れたが、一年もしないうちに旧に復する。

カニステル 収穫のために2～3メートルにおさえているが、放っておけば大きくなりそうだ。

千年木40～50本 挿し木でどんどん増えるので、敷地境界の垣根の役目を果たしている。ペランダの夕陽さえぎりなどにも活用している。

2019年04月04日

14. わが庭畑の「中くらい」の大きさの樹木

わが庭畑の「中くらい」の大きさの樹木を紹介しよう。2～5メートルぐらいの高さだ。

バンシルー

アセローラ 2本あったが、そのうち1本を昨年切り倒した。収穫は一本で十分な量だ。

ピタンガ3本 そのうち一本は収穫のため高さを2メートルで抑えている。他は、目下生育中

ハイビスカス2本

フウリンブッソウゲ2本

この4本いずれも3～4メートルの高さで、花を長期にわたって、大量に咲かせてくれる。ハイビスカスは他にもある。

クチナシ

メイフラワー

ホワイトサボテ2本

インドナツメ 現在は4メートルを越すが、大胆な剪定をして、半分ぐらいの高さにするのが、収穫の秘訣。

ティートリー 高さ6～7メートルだったが、今年の台風で、幹が折れた。折れたのは3～4回目ぐらいか。また、回復するだろう。

写真は、根元付近。何回も折れた痕跡とそこから吹きだしてきた新枝がわかる。



ミルクブッシュ 2メートルを越して樹木らしくなってきたが、枝葉を見ると多肉植物のようだ。挿し木をしたら、立派に根付き成長している。

コルディリネの仲間 千年木の仲間 2種10本以上ある。

マッサン（ドラセナの仲間） 挿し木で殖やしたので、10本ほどある

マルギナタ（ドラセナの仲間） 挿し木で殖やしたので、これも10本余りある

他にも、クロトンをはじめとして、垣根めいたものとしていろいろな観葉植物を植えている。ソングオブインディアというのが、一番繁殖している。繁殖力旺盛で、どんどん剪定整枝する。

我が敷地の観葉植物については、2018年2～9月に25回にわたって紹介したので、詳細はそちらをご覧ください。

2019年04月11日

15. わが庭畑の将来大きくなりそうな木、そして低木

（前回の続き）将来大きくなりそうなもの

マキ（チャーギ） どこからか種が飛んできて、発芽。現在50センチぐらいだ。

ゲッケイジュ 10年以上前に植えたが、日陰になってきたので、昨年移植した。

我が畑庭を森・ジャングルにしないためには、間引きが毎年一本ぐらい必要だ。木と木との距離が近づきすぎないようにしている。

これらの剪定や間引きが我が庭畑作業の中心の一つだ。地面の草取りも大変だが、草取りよりも剪定・間引きの方が楽しい。なぜだろうか。

低木はたくさんあるので、一部の紹介にとどめよう。

マッコウ （写真）



庭で一番多い。多分数十株あるだろう。種こぼれで自生しており、あちこちに次々と芽を出してくる。この土地に合っているのだろう。大きくなると、間引き剪定する。

サンダンカ

最初は購入した苗を植えた。背が高いものと低いものだ。こぼれ種から殖えてくる。現在10本

自然 2016～2023年

ほどになる。美しい花を長期間見せてくれる。
試しに白花も育てている。

オーストラリアン・ローズマリー

似ているが、ローズマリーではない。樹形と
可愛い花が美しい。現在高さ1・5メートルほ
ど

リュウゼツラン (写真)

隣家と植物交換で植えて、もう10年以上に
なる。しっかり育ち、根元から子株が出てくる
ので、株分けもした。葉が美しいので好まれる。



コーヒーノキ 我が家の定番



ゲッキツ 自生しているので、あちこちに育つ。
葉がかわいい。

2019年04月18日

16. オオゴマダラの交尾 わが庭畑の
背の高い草

今朝、ハウライカガミの近くで、オオゴマダラの交尾を見つける。先日、羽化したものたちだろ
う。近くを別のオオゴマダラがとんでいた。

背が高い草の仲間として、わが庭畑の定番の
三つを紹介しよう。

ゲットウ (サンニン) (写真)

どんどん大きくなり、飛んだ種で、あちこち
で増える。花も葉も美しいが、過剰な生育力に
は困ってしまうほどだ。薬草として活用。





写真には、今年の開花一号が写っている

ハンギンギヘリクニア

ここに住み始めた頃、いただいたものを地植えにしたら、随分と繁殖した。初めはストレリチャ（極楽鳥花）だと思っていたが、熱帯植物の写真集などに出てくるものを見て、この名前を知った。

いまや高さは3メートルほどになる。数十本が大きくまとまって育ち、合わせて直径2メートルぐらいだろうか。植物園の温室のような感じになってきた。管理が大変なので、全体をロープでくくっている。

ベチパー (写真)

これも我が家の定番 防虫用薬草として活用 シャネル5番の原料らしいが。

植えっぱなしだが、毎年、新芽新茎新穂がたくさん出てくる。というより繁茂している。

これから、新芽がたくさんできて繁茂状態に向かう。



2019年04月25日



17. ヤリノホクリハラン クワズイ

モ オオタニワタリ オオアブラガヤ

木陰に育つ自生の植物

木陰に育つ自生の植物

ヤリノホクリハラン

きれいな葉の草だが、名前が不明だった。沖縄生物教育研究会編「沖縄の生きものたち」

2004年新星出版で、わかった。

クワズイモ (写真)

あちこちから次々に出てくる。強力な植物。これが大都市の花屋さんで売られているのを見つけて驚いた。我が家では、邪魔になるので、どんどん処分している。



オオタニワタリ (写真左)

近隣の家と植物交換をして植えたが、胞子でどんどん殖える。庭畑の通路にたくさん見かける。写真は、通路の石の間から出てきた。



オオア
ブラガ
ヤ
後日修
正 シ
ュロガ
ヤツリ
である
ことが
判明



(写真右)

近所の水路脇で大繁殖 一株を庭に植えたら元気よい。どの茎にも可愛い花がたくさんついている。

2019年05月02日

18. 季節変わりの風と水 景観 海とイノー

ウリズンから小満芒種(沖縄の梅雨時)へと季節が移り始める。もう寒い日はないだろう。季節変わりは風で感じる。西風や北風が減り、南風や東風が中心になる。PM2.5も減ると期待したが、2日は大量に押し寄せてきて、外出できない。

風で困るのは、台風の時の潮風だ。台風の2、3日後に、潮風を浴びた木の葉が黄変し、しばらくして落ちる。しかし、潮風に強い植物も多い。マッコウ・長命草などがそうだ。

雨量が多い日には、わが庭畑の地下水レベルが上がり、あちこちから水が染み出してくる。多い時は、流れを作ることもある。水を通さないクチャの上に、水を通す石灰岩があるという、この地域の地質は、湧水をつくり、樋川をあちこちに作っている。

昨年、この湧水で池を作ろうとしたが、池になるほどの水量ではなかった。

海・丘（山？）・傾斜地・平地といった地形のバリエーションが豊かで、動植物に恵まれた我が家周辺は、景観に恵まれている。我が家を初めて訪問する方には、ベランダからの景観を味わっていただいている。大いに感動していただく。この地域では、一軒一軒が異なる景観を持っている。私達が近所のお宅を訪問して、景観を拝見すると、家ごとの違いに驚くほどだ。

そんな所なので、景観をウリにするカフェ・ペンションなどが多い。

その景観も、自然が作り出したというよりも、自然と人間との合作なのだ。いくつか述べよう。

1) 海とイノー

かつてはジュゴンも暮らしていた。海産物が多く、それを主食料にして旧石器時代から人が暮らしていた。西に数キロ行けば、港川遺跡、サキタリ洞など、東に2キロほどには、百名貝塚、おもろに出てくるやぶさちの浦原など、がある。

私達が住み始める以前、ここに火力発電所構想があったそうだが、地元民の反対などもあってか、計画中止になったとのこと。今は石川に発電所がある。それができていれば、大変化だったろう。というよりも、現在のここは存在しないだろう。

イノーは、浜下りの時はもちろん、日常的に海産物を求める人が多い。テラジャーなどの貝類、タコ、そして網漁で小魚をとる人もいる。磯釣りもよく見かける。子どもには、絶好の遊び場を提供する。人気第一は無数のヤドカリ。1平方メートルに100以上か。

台風の際、板干潮（いたびし）の上を高波が通り、海岸や防風林を超え、畑まで水浸しにしたこともある。津波の時の心配事でもある。

写真は、畑——海岸——イノー——太平洋を、我が家ベランダから写す



2019年05月09日

19. 景観 海岸 畑

前回の景観の話の続き。自然と人間との合作物語だ。

2) 海岸

自然豊かな沖縄でも、人工構築物がない自然海岸は珍しくなっている。近辺では、我が家から東に2キロにある百名海岸ぐらいだろう。多くは防波堤が作られている。我が家の前の海岸も、防波堤に近いものがあるが、堤の先は階段状になったブロックだ。その半分ほどは砂におおわれているので、自然海岸に近くなっている。その砂浜にウミガメが産卵にくることもある。ウミガメの遺体を見ることもある。

いろいろなものが流れ着く。目立つのは、プラスチック製の丸いブイ。それを拾って、恵美子は絵を描き、我が家に飾っている。総計30個を超すだろう。ブイアートと称している。

困るのは、ごみが流れ着くことだ。ごみは、海岸だけではない。防風林の中に不法投棄されたものが相当な量だ。先日の数百人規模の清掃の際も、それが最大の量だったようだ。

海岸に流れ着くものを材料にアートを作る人が、いろいろなものを集めることもある。ちなみに、ここの海岸には文化財になる遺物も流れ着くので、文化財の指定地にもなっている。

防波堤の上に散歩道が作られている。その両脇は、防風林になっている。防風林は防潮林でもある。海岸側の防風林は、日差しをさえぎるので、絶好の涼み場だ。なかにはテントを張る人もいる。バーベキューをする人もいる。

防風林は、モクマオウやユウナの木々でできている。高さ5メートルくらいだが、高くなると、台風で折れてしまう。

3) 畑

我が家がある70戸余りの中山集落は、海岸から300メートルほど離れた所にある。集落がある所から急坂となって、海拔百数十メートルのグスクロード、そして琉球ゴルフクラブに至る。

集落と海岸とに挟まれたところは畑だ。1960年頃までは水田が多かったが、サトウキビ景気にくくと、畑になってサトウキビへと転換していく。しばらくして、サヤインゲンなどの野菜栽培が増える。1980年代には土地改良・畑整備が行われる。

こうして現在にいたる。現在は、サヤインゲン・ゴーヤ・オクラなどの野菜、菊などの花、そしてサトウキビである。ビニールハウスも多い。冬場の夜になると、電照菊の明かりがあちこちに見られる。

2019年05月16日

20. 景観 道 川

4) 農道・道

道も景観の一要素で、景観に輪郭を与える。このあたりの道には、国道、市道、里道、農道がある。まず農道。私がここにきた頃は、農道舗装は半分ぐらいだった。その後10年ぐらいかけて、農道はほぼすべて舗装された。そのため、一部の農道は、自動車が多く通るようになった。

市道は、集落間をつないでいる。里道は、集落内の道で、車が通れる場合でも、すれ違いには苦労する。昔からの道で、人しか通れない道もある。中山では、昔からの道で集落外とつながる所に、石獅子が5体置かれている。元々は、集落端に置かれていただろうが、住宅が移動して、住宅内になってしまったものもある。

三叉路で突き当りになるところには、石敢當があったりする。

かつては集落間をつなぐ重要な道路だったろうが、新しい道路が出来て、いまでは旧道化したものがある。

国道331号線は、集落中央をとおり、集落を二分していたが、数年前に中山トンネルを通るバイパス国道ができた。このトンネル周辺が、新しい景観を作り出している。



道で苦労するのは、道路脇の草刈だ。国道や市道は管理者がするが、農道や里道は、字で行なう。大変な距離なので、字の共同作業は大変な量になる。半日かけても終わらない年もあった。

国道や国道の上にある旧道からは絶景箇所が多い。車を止めて写真をとる人も多い。

5) 川・排水路 ガルガー滝

グスクロードや琉球ゴルフクラブあたりが源

流になる川が4本、中山地域を通過して海岸まで流れる。

西端がガルガー。途中、国道をくぐるあたりで、滝になる。落差20～30メートルぐらいだろうか。大雨の後、見事な景観をなす。でも、なぜか知らない人が多い。ガルガーの滝上部の旧道を越えたあたりの広場は、戦後一時期、玉城小学校が置かれたところだ。そのうえはグスクロード公園。

東端がビンガーだ。我が家より少し下で、2つに分かれる。その二本に囲まれているのが、我が中山3班だ。

4本とも、雨の時期は水量がかなりある。とくに大雨の時、あふれ出すほどだ。国道バイパス工事の際に、水対応についての注文がたくさん出された。さいわい、ここしばらくは川からあふれ出すことはないようだ。台風時に海岸から来る水の方が問題になっている。

4本とも、3面コンクリート貼り、川というよりも排水路という感じだ。そのため、魚など生きものが少ないのが残念だ。

2019年05月24日

21. 景観 森 建物

6) 林 森

このあたりで最大の森は、中山集落からグスクロードの間にある広大な森だ。そこにはたくさんのガマもあるようだ。中山が簡易水道だったころの水源地もある。森の西端に富里集落がある。東端は百名・仲村渠・垣花集落になる。垣花グスクもある。この森に一人で入ったことはない。共同作業で入ったことはある。巨大なガジュマルなどが並ぶ。

集落周辺にも森というか林が点在する。沖縄では森（ムイ）といったほうが感じが出る。我が家の隣の巨大墓も離れた所から見れば、森である。中山の東端にもかなりの森がある。

我が家をグーグルマップの航空写真で見ると、ほぼ360度緑色の森に囲まれているように見える。

7) 建物

周辺の建物は、ほぼすべてが住宅だ。例外は、畑のなかの作業小屋ぐらいだろう。大規模建物となると、少し離れないとない。1キロ離れた東の丘の上で百名区域内にあるKDDIの通信基地と5階建てぐらいのアパートが、我が家からは見える。

西の丘の中腹には、2キロほど離れて、JAの倉庫、牛乳工場が見える。1.5キロ離れた西南の奥武島橋近くには、3～4階建てのアパート。2キロ離れた西の奥武島入り口交差点あたりにもアパートが見られる。このように、我が家から1～2キロ離れたところで、やっと高い建物が見られる。それ以外は、住宅とっていいだろう。

住宅にはコンクリート造りが多いが、木造が何軒かある。東側にある字玉城の丘中腹の木造は風景のなかに馴染んでいるが、ファッションブルなので、ある意味では目立つ。その地域は、景観保護が市条例でなされている。

西方向は、10キロ先ほどまで視界が広がる。その海岸には摩文仁が見える。北にむかって、順に書こう。平和祈念資料館・平和祈念堂・風力発電・ゴルフ場建物・自衛隊の通信基地 その向こうの空には、那覇空港を離発着する飛行機がよく見える。

8) 電柱と電線 携帯電話の通信塔

この素晴らしい景観の邪魔をするのは、電柱・電線・通信塔だ。

9) ゴルフ場・公園

我が家からは直接は見えないが、近くにある



のは、琉球ゴルフクラブとグスクロード公園 直線距離では1キロ前後だ。

以上が我が家からの景観だ

写真は、タマグスク近くの急坂から、中山海岸方向を見たもの

2019年06月01日

22. 自然の動き・変化を感じ取る 「自然の征服」ではなく「自然の一環」としての人間

前回までは、眼に見えるものを中心に書いた。今回以降は、それにこだわらない。匂いや音、さらに体に触れる空気、つまり風、そして水分、雨・雪・霧。それは湿気としても感じる。そして、寒暖という温度を感じる。

こうしたものは、動いている。動いているものが、身体に当たるから感じるのだ。身体への刺激は、気分をつくり、心を動かす。さらに、人間の側から動いて、逆に自然にかかわる。心地よい風なら、もっと当たろうとする。強い風なら、風あたりが弱い所へと移り、あるいは衣服を重ねて防ごうとする。

こうした自然の動きは、変化ともいえる。変化は、時間経過とともに新しい様相を生み出し続ける。その変化が、繰り返すなかで周期をなすことも多い。夜一昼、春夏秋冬、晴れ・曇り・雨。これらには、予測が可能なほどに、強い定めがあるものから、予測困難なものまである。

動きには、瞬間ごとに感じるものから、一日とか一週間とかでは、変化を感じられないものまである。大地の隆起・陥没もそうだが、地震などにもそうしたものが多い。体を感じる地震は、大地震のなかのほんの一部だ。でも大地は確かに動いている。動いた結果が、大地の現在の姿なのだ。

空気の流れにともなう気象変化は、余りにも激しく予測不能とさえ思われてきたので、なおのこと予報への挑戦が続いてきた。時には、気象を変えようという営みが行われた。雨乞いの祈りもそのうちだろうが、近年では、科学技術を使って気象変化を起こす試みも行われている。

こうした自然の変化には、自然と人間の合作としての変化が意外に多い。時には「自然の征服」などという言葉を使って、自然を支配しようとする考えに出会うこともある。人間の「力」が高まって、「自然征服」が現実的課題となっていると思う人がいよう。だが、原水爆や原発などが示したように、「征服」できていないことの連続だ。『征服』できているという傲慢とさえいえる思い上がりだが、強烈な「反撃」をもたらしたとはいえよう。近代以降における戦争や森林破壊が自然破壊であるというとらえ方を、きちんと持つ必要がある。

人間が自然のなかの一員であり、自然のなかでしか人間は生きていけないことをきちんと踏まえる



必要があろう。

ところで、自然の動きや変化を感じるものの個人差は大きい。自然を受け取る人の気分・感受性には大きな差異がある。

そんなこととかかわって、次回から、自然と人間についての私流のエピソードを書き並べていこう。

写真では、干潮から満ち始めて、潮の流れが海面上までくっきりと見える 我が家ベランダから撮影

2019年06月08日

23. 気候変化の実体験 乾燥と湿気

1) 雲・霧などの激しい気候の動きの体験

長野県などの山間部に出かけると、急に雲が迫ってきて、雨が降り出すことによく出会う。谷間から雲が湧き出てきて上昇してくるのを、山の上の方にいて実見することもある。

同じようなことは、私が住んでいる所でもよくある。海拔70メートルあたりまで降りてきて、雲か濃霧かは区別ができないが、その下では多分、雨が降っていそうに思われる光景をよく目にする。海拔25メートルぐらいの我が家のあたりまでは降りてこない(写真)。車で、知念半島の丘陵部を上っていくと、その雲・霧の中に突入していく。親慶原やつきしろあたりでは、視界が30～50メートルぐらいになり、スロー運転しなくてはならなくなる。

新興住宅地のつきしろは、湿気の高さで住宅建設が思うように進まなかったが、ここ10～20年、なぜか濃霧が減り、湿気も落ちてきたのだろうか、再び建設が進み始めている。ここ15年の濃霧の減少は、私も感じている。近年の地球上の気候変動が、こんな形でも表われているのだろうか。

台風の動きや風速50メートルを超える強風は、何度も体験している。地球の激動を感じる。特に、台風来襲時に、高波が押し寄せ、リーフを洗う時、さらにリーフの手前のイノーにまで高波が押し寄せ、時には防波堤を超えて、畑を水びたしにすることがある。



2) 乾燥への身体の反応

ヨーロッパやカナダに行くと、空気の乾燥を実感する。気づかぬうちに、身体が反応してくる。喉がとくにそう。乾燥を避けるために、どなたに習ったかは忘れたが、ホテルの浴槽に水を貯めて、浴室のドアを開けて、部屋全体の湿気を保つようにする。

対照的なのは沖縄だ。湿気への対応が中心になる。温度計だけでなく、湿度計が重要になる。平均すると、70～80%代が多いだろう。70%以下になると、気持ちがよくなる。我が家の湿度計は、「心地よさ」まで表示する。それが「不快」と表示する時でも、70%以下であれば、歓迎だ。まれに60%以下になると、「今日は乾燥しているね」と夫婦会話の話題になる。

空気清浄機を買いに行った際、ほぼすべてが加湿機能付きで、それはいらないと店員にいうのだが、そういうわけにもいかないようだ。だから、我が家の清浄機では、加湿機能のために水注入はしていない。

温度を下げるために、エアコンを使うことも多いが、除湿のために使うことも多い。我が家の電気機器の最長老は除湿器で30年余り使用しているが、故障は全くない。不思議だ。つけておくと、一日余りの除湿でたまった水で容器がいっぱいになるほどだ。

湿気対策ということであると、地面からの湿気侵入も大きい。地面に近い一階の床は、建築後1ヶ月もしないうちにカビだらけになり、床張り替えになった。床を10センチ余り上げ、その隙間に炭を大量に敷きこんだ。その一階にピアノがあるのだが、除湿剤を入れ、時々エアコンの除湿運転をしている。おかげで、ピアノだけでなく、書庫の本も健在だ。

2019年06月14日

24. 海の色 日の出・日の入り

3) 海の色の変化 七色の海は夏

「沖縄の海は、七色に輝いて美しい」とよく言われる。しかし、年中いつもというわけではなく、夏の日差しが強い時期に、美しい七色が現れる。我が家のベランダからも見られる。海の深浅によっ



て、色が異なってくるのだ。浅い所では色が薄く、深い所では濃くなる。太陽光線が強くないと、色のグラデーションはあらわれにくい。冬場は無理だ。

写真は、我が家ベランダから撮影 手前イノーにはグラスボートが走っている。沖には大型クルーズ船が見える。

4) 日の出・日の入りの太陽の位置

我が家東方には丘があるので、太陽が見え

始めるころ、あたりはすっかり明るく、日の出といった感じではない。日の出を見るときは、海岸とかイノーに出かける。夏場では、おおよそ久高島あたりから昇り始める。初日の出のころは、さらに南方向で見られる。ヤハラヅカサで初日の出を見ることが多い。

といっても、水平線から太陽が昇るのが見られる確率は10%内外だろう。水平線近くには雲が多いためだ。だから、日の出時刻の15～20分後に見え始めることが多い。雲間から見え始める赤味がかかった太陽は美しい。絶句する。そして、昇り始めた太陽から手前の海面には、橋桁のように、横筋の線がつぎつぎと映る。

太陽が出てくる場、そして沈む場を、ティダガアナ（太陽の穴）という。なるほどと思う。

ところで、沖縄では水平線近くの太陽は拝むが、上昇した太陽は拝まない。キラキラ照り付ける上空の太陽は、避ける対象なのだ。

日の入りの太陽は、我が家のベランダから美しく見える。よく写真にとる。日の入りが雲に隠される確率は、日の出より低く、60～70%ぐらいだろう。

夕陽の思い出。1970年代末、琉球大学教育学部の水泳実習は、名護浦荘で行なわれた。近くの海岸で、キャンプファイアをするが、その指導にかかわった。こんな演出をした。

参加者全員が並んで、日没シーンを見る。直前に石川啄木の詩を朗読し、その後、夕陽を見つめる。太陽が沈み始めて沈み終わるまでの数分間、200名近くが沈黙して見つめる。それまでのざわつきがウソのようだ。その後、暗くなり始めると、海の中から、小船に乗った白衣の女神がかがり火をもって上陸し、ファイアに着火するという演出をした。

この演出は、そのころは気づいていなかったかもしれないが、沖縄の長年続いてきた信仰生活と響き合うものだった、と今になって思う。

後ろから男子学生が泳ぎながら小船を押してくるのを、海岸からは見えないように演出した。押し役に大感謝だった。

2019年06月20日

25. 星 遠くに見える・聞こえる人

5) 星の位置

我が家からの西の空は、那覇などの都市の明かりが強くて、見える星の数は少ない。東の空は暗いので、よく見える。天の川も、上り始めた東の空でよく見える。さそり座も鮮明に見える。北の大都市では見つけにくい星も、低緯度のここでは、よく見える。星の本を見ながら、星の名を覚えていく。

3年前にニュージーランドで見た星空は強烈だった。南半球なので、星の位置が大きく変わる。半分近くが、初めて見る星だった。

6) 遠くが見える人 遠くからの音が聞こえる人 船・飛行機

海岸近くに住んでいるので、海岸方向にはさえぎるものがない。船や飛行機は、かなたに消えるまで、見えるはずだが、視力次第だ。星を見ることも同じだ。ここに住み始めて視力がどんどん良くなる。当然だろう。

音も遠くからのものまで聞こえるはずだが、海方向から聞こえる音は、船・航空機の音、そして、波がつくる音、すごいのは台風時の海鳴り。

遠くで稲妻が光る。どのくらい距離があるのかと思い、雷鳴が聞こえるまで数を数える。30秒以上たっても、音が届かないことが多い。10キロ以上先だろう。

隣の森、直線距離20メートルほどの所に落ちた雷の音はすさまじかった。バリッと木が裂ける音が聞こえた時もある。

嫌な音は、米軍のアンチステルス性能の高いジェット機。音を超える感じだ。衝撃波を伴うからだろう。ここは、嘉手納基地から、南東方向の海上にある訓練海域に向かう途中に位置する。写真にとろうとするが、早すぎて取れない。その点では、那覇空港に出入りする民間機は、落ち着いているので、よく写真にとる。

ヘリコプターは、米軍・自衛隊・海上保安庁・警察・報道機関など多種なものが飛ぶ。

飛行機と比べると、船の音はやさしい。沖を大きな船が通る。最近、クルーズ船も通るようになった。巨大な船だ。我が家ベランダから撮影



2019年06月26日

26. 静けさのなかで聞こえるもの

我が家を訪問されて、「静かですね」とおっしゃる方が多い。私達も静かだと感じることは多い。ここに住み始めた頃、静か過ぎて、かえって気になるほどだった。というのは、人工の音が少ないという事だろう。

聞こえる音は、自然の音がほとんどだ。

まず朝の鳥のさえずり。鳥のさえずりで目が覚めることもある。ピークパーチクと細かくさえずるのは、小さな鳥たち。タイワンシロガシラが代表的だろう。メジロもそうだ

大きな声で、鳴きかわすのは、スーサー（いそひよどり）。ハトもそうだ。50メートルくらい離れて、鳴きかわす。信号を送っているようだが、どんなメッセージなのだろうか。ハトがつがいでもかみ合う声もある。うるさく感じるのは、コウモリのからみあい、ギャーギャーと聞こえる。

長く鋭い声は、ミサゴやツミなどの猛禽類だろう。いやなのは、カラスの鳴きかわす声。

ウグイスは、我が家に最接近して啼く。聴いている私との距離は10メートルもないだろうが、木陰に隠れるのがうまくて、実物を見るのは滅多にない。啼くのは早春と決まっていない。夏でもよく啼く。

夏から秋にかけては、夜の虫の声もいい。蝉もよく聞けるが、暑い時に限ってうるさい鳴き方になる。

近くの農家から聞こえる牛の声もいい。朝早く「食事寄せ」という声だろう。しかし、牛小屋は閉じられ、声は聞こえなくなった。

夜になると、やもり（ヤールー）のキッキツという声も可愛い。めったにきかれないが、ねずみのチューチューは、嫌な声だ。

自然の音は、台風など風が強い時の海の音だ。激しい波の音を中心だ。ゴーツという音が聞こえることもある。

対照的な人工音の代表は、自動車・バイクの音だ。といっても、国道からは100メートル近く離れているので、大きな音ではない。特に中山トンネルができてバイパスの方に交通が流れてから、一層静かになった。猛スピードのバイクは、そちらを走る。

自動車の音で大きいのは、救急車が多い。たまに消防車・パトカーの音も聞こえるが、多くはない。交通安全などを呼び掛ける広報車もたまにはある。選挙カーも時期には来るが、都市ほどはこない。救急車は、集落の中に入ると、音を消すようだ。まれに、海難事故警戒を呼び掛けるヘリコプターからの音が聞こえる。さらにまれに、モーター付きのパラグライダーのうるさい音を聞く。

公民館のスピーカーの音も聞こえる。我が集落よりも隣接集落からの音の方が、圧倒的に多い。風向きによるが、5つくらいの集落から聞こえる。公民館前広場の綱引きの音も聞こえる。グスクロード公園の祭りの音も聞こえる。我が家屋上は、グスクロード公園で打ち上げる花火見学の絶好の場だ。奥武島ハーリー観覧もできる。



写真は庭のトンボ 種名は不明

2019年07月02日

27. 感じ取れるかどうか、微妙なもの

感じ取れるかどうか、微妙なものもある。

年末年始、平和祈念公園から空にむかって、サーチライトが放たれる。うっすらと天空に光が届くので、神秘的でさえある。10kmも離れている我が家からは、光が弱くなるので、写真にはとりづらい。

対照的なのだが、沖縄外の大都会で夜空にうつる激しいサーチライトを見つけたが、パチンコ屋から放たれているのに気づいて興奮めしたことがある。

ここからは南十字星が、理屈上は季節によっては見えるそうだが、見たことはない。

私の冗談。初来客には、ベランダで太平洋を見ていただくことが通例だ。その際、「心のきれいな人には、海の向こうにフィリッピンが見えます。」と語る。すると、たいていの人には「ウソでしょう」と応えるが、なかには神妙な顔をして、海のかなたを眺める人がいる。

最近では、この冗談を真面目くさって言えなくなってきたためか、真剣に眺める人は滅多にいない。

匂いでいうと、畑の匂いが気になる人もいる。堆肥の匂いだ。農地近くに住めば、あきらめて「馴染む」しかない。だが、10年以上前に、近くにある養豚場から出てくる匂いは嫌われ者だった。対照的に花の匂いは愛される。クチナシの花、コーヒーの木の花、ランの花……

散布された農薬は、私にとっては嫌なものだ。散策中に農薬散布に出会うと、迂回する。これまた



10年以上前、絨毯爆撃のように地域一帯に散布されたことがあったが、その時は何時間か、窓を閉め切った。

近年では、PM2.5が、空に霞をかけることが多い。敏感な私はすぐに気づくが、気づく人は大変少ないのが実情だ。

庭畑のクモの巣も見つけにくく、ひっかかりやすい。初めてオオジョロウグモに出会う人は、巨大なクモに出会って、肝を冷やし、我が庭畑の再散策さえ躊躇する。

写真は、ディフェンバキア（観葉植物）

穂のような花が出ている

2019年07月08日

28. 陰暦と生活 昼と夜の時間 季節感覚

このあたりで生活すると、陰暦（太陰暦、旧暦）が、ごく日常的に出てくる。月見をうんと楽しめる所だが、いうまでもなく陰暦だ。そして、月の満ち欠けは、潮の干満に連動する。釣り人も含め、漁業関係者は、干満を記した暦が必需品だ。沖縄で流通している暦、新聞社・農協・役所などが配布している暦には、潮の干満だけでなく潮位が記されている。海岸やイノー散策をする私にとっても必需品だ。

潮の干満に出産日時が連動するのは、すごい。我が家の起工式は、満潮時に合わせて行ったが、ちょうどその時、孫の出産の電話が鳴った。

地域行事も多くが旧暦だ。正月だけは新暦が多くなったが、盆は旧暦が通常で、新暦や月遅れでやることはない。私が沖縄生活を始めた1970年代前半の旧正・旧盆では、商店街もしまつて、買い物や外食にも困ったことがあった。

浜下り、清明、ハーリー、綱引き、エイサー、十五夜など旧暦がほとんどだ。ただ平日だと都合がつかない人が多いので、その前後の土日にずらすことを見かける。

ところで、昼の長さや夜の長さは、季節によって変わる。そこで、近世以前は、季節によって、時間を変えてきた。時間を伸び縮みさせていたのだ。夏の一時間と冬の一時間では、大きな違いがあった。

季節に合わせた時間感覚をもっていたのが、時計が普及し、時計に合わせた生活感覚が普通になった現在では、年中変わらない時間感覚が広がった。それは、時計による分秒刻みの論理性中心といえようが、自然に生まれる時間感覚・季節感覚との断絶がある。

ところで、「四季」という季節感覚は、日本の本州に適合的だが、沖縄ではそうではない。「二季」だという人もいる。夏の終わりの10月後半に、初めての北風が吹くと、冬になるというわけだ。あえて四季というと、夏と冬がまずあって、その移行期として春秋が存在するというわけだが、それが沖縄の生活感覚に合う。

渡り鳥などは、二季感覚だろう。移行期に渡りをするのだ。だから、俳句の季語を、沖縄でいかに適用するかは苦労しているようだ。沖縄の季節感覚は、夏と冬、その両者間を移行する時期としての秋・春があるというものだろう。冬のものが消えて夏のものに移る時期として春があるのだ。

その移行を示すサインは、自然の移ろいを感じさせるものだ。

アーサの緑でイノーが染まる

葉の色が急激に緑になる

出現する蝶の種類・量が激増する。

蝉が鳴き始める

鳥の渡り

森の中にいた鳥たちが、餌を求めて、わが庭畑にやってくる。

森の中の餌が少なくなっているためだろうか。

アーマン（オカヤドカリ）がうごめき、産卵のために海岸に向かって歩いていく。

写真は本文にかかわりなく、サガリバナ



2019年07月16日

29. 災害と恵み

我が家近辺で災害というと、まず台風だ。とくに風の強さは、沖縄外から移住してきた人にとっては、驚くほどのものだ。私が中学校一年の時、巨大災害をもたらした伊勢湾台風に出会った。木造の実家も吹き飛ばされそうになり、家族全員が夜通し対応に追われた。近くの大木が折れて飛ばされ、家の直前に落ちていたことに、翌朝気づいた。

その時の風速は40メートルに達していなかった。それに比べると、現在の我が家近くの糸数の観測では、ここに住み始めて以降の15年間で、2度も50メートルを超えた。40メートルを超えることは、毎年の事と言えよう。南斜面にあって森に囲まれている我が家は、丘上の糸数の数値よりやや低いだろうが、それでも50メートル内外が吹いているだろう。

しかし、風による建物被害は経験していない。といっても台風後の庭畑の片付けは大変だ。収穫前の果物の収穫ができないとか、潮風によって葉っぱが数日後に大量に落ちるとかはある。

台風による雨量は大きいし、近くの排水路があふれることがあり、畑の冠水のため、農家が困ることがある。畑の冠水と言うと、今ではむしろ、海からの高波が、防波堤を超えて、畑を冠水させることの方が多い。南風が強い時、高波がリーフを超え、板干瀬のうえを走って、海岸まで押し寄せるからだ。

ある近隣の方は、「台風は、雨をもたらし、山や海を掃除してくれるから、ありがたい」と語る。たしかに、台風後の山や森はすっきりする。下草や枝葉を吹き飛ばしてくれる。台風が来ない期間が長くなると、山は雑然とし汚くなる。台風で海もきれいになる。海岸にごみが集積することもあるが。

我が家の西南端にあるチシャノキは、高さ8メートル近いので、剪定を時々するが、大きすぎて、手に負えないと感じるときもある。オオイタビが伸びて締め殺し始めた。オオイタビを除去しないでしたら、チシャノキの上方箇所をおおってしまった。枝葉を出せないで、弱り始める。その時に来襲した台風が、弱った枝葉を吹き飛ばす。おかげで、現在は高さが7メートル止りで、生育をストップさせている。さらに、すぐ近くから伸びてきたシャリンバイが追い抜こうとしている。森のなかの生存競争を間近に観察しているようだ。こうして、「山が掃除」され、適切に管理されるのを見るという感じだ。

台風で、現実には困るのは、停電が多くなり、停電期間が長くなることだ。電線が切断されたり、台風に伴う落雷によるものだろう。

台風が、大雨をもたらすことも多い。そのため、崖崩れが起きたことが、ニュースで報道されることも多い。でも、畑庭にも不足気味の水分をもたらすという利点がある。さらにダムの水量を増や

し、水道の水供給を安定させてくる。だから、水不足になりやすい8～10月ごろに台風がこない
と、「今年はこないな」と嘆く人も出てくる。

沖縄での災害の一つは、早魃なのだ。沖縄での稲作が不振になった一因は、昭和30年代の大干ば
つがある。その時、サトウキビへの転作が進んだ。

だから、昔から雨乞いは重要な行事だった。我が家近くのタマグスクは、雨乞いの重要な場だ。

もう一つ大きな災害は、地震・津波だ。しかし、大津波の周期が100～200年で「忘れた頃」
にやってくる。前回の災害を「忘れた」頃に低地に住む人が増え、災害に出会ってしまう。明和の大
津波から250年ほど経った現在は、そういう歴史時点にありそうだ。

2019年07月23日

30. 人間と自然との関係と、自然観

私の近辺には、自然の猛威に対して「闘う」というよりも、「じっと耐え抜く」「すり抜ける」とい
う対応が見られる。自然は「闘う」相手ではなく、共生している「友達」だという感覚もある。友達
関係をうまく保ちながら、やっていくという感覚だ。

また、自然は「神様」だという感覚もある。この感覚は、最近まで強力だったし、今でもそう感じ
る人は多い。ニライカナイ信仰、御嶽（ウタキ）信仰などは、そうした色彩が濃い。自然の至る所に
神がいるというアニミズム信仰を、幼く古いものだというとらえ方をして、自然と「対峙」して自然
と闘うことを強調する捉え方もある。この両者を併存させている人も多い。

自然共生について書こう。人工物が少なく、ほぼ自然のなかで「自然と共生」しつつ暮らしている
私は、自然を五感で感じることが多い。さらに言うと、自分の身体も自然であることを感じることも
多い。自分の身体がもつ自然性と共生することが大切だと思う。

自然には、生まれ、成長し、維持し、消滅するという循環・流れがある。その流れに乗って生きて
いくのだ。そうではなく「自然と闘う」ということは、自然を感じとる力と意欲を弱めることではな
いか、と思う。

人間が家を建てて生活することは、その場の先住民である動植物との緊張関係を生み出す。その緊
張を和らげるために、かれらのそれまでの「生活」を出来る限る尊重することが大切だ。できる限り
共生するが、出会いが難題を起こす動植物には、必要に応じて棲み分けることが求められる。

「鳥が家の中に入ることを不吉なこととして、一晚海岸で家族がすごし、翌日自宅に戻るとい
う」習慣が、このあたりにも、数十年前まで存在した。我が家でも、鳥に限らず、アリをはじめとする多
様な動植物が、室内に入り込むことがしばしばだ。上手に棲み分けることが大切で、その工夫と知恵
を蓄積してきた。

ただ棲み分けを過度にすすめ、自然と人工との境界を強固にすることはまずいと思う。越境を時と

場合によっては容認するファジーな境界であってほしい。

そんな考えが、少しずつ広がっている。コンクリートやアスファルトの道路は、境界を強固にしすぎるので、ファジーな要素をもつものへと転換させる工法が追求され始めている。クイナの移動を妨げないようにする工夫もその一つだろう。このあたりでいうと、海辺での産卵のために、山から海岸まで移動するアーマン（オカヤドカリ）が、移動可能な道路にする工夫が求められよう。

自然豊かなここに生活し始めて15年になる。生活と接している自然について知っていること感じていることが、飛躍的に増えた。生活し始めた以前と比べると、10倍どころか100倍ぐらいかもしれない。そのことが、私の人生をすごく豊かにしている。できれば、多くの人に共通の体験をもってほしいと願う。

2017～2022年 連載外の自然

2017年06月15日

トンボ ヤゴ

右写真は、トンボの羽化の最終段階で、飛び立つ寸前。庭に池をつくりメダカを育てているが、そこにホテイアオイを入れている。そのホテイアオイにトンボが産卵する。メダカもホテイアオイに産卵する。産卵した卵をメダカ自身が食べてしまうので、バケツに卵のついたホテイアオイを移す。自動的にトンボの卵、幼虫のヤゴも移る。ヤゴは、メダカの卵を食べるので、メダカが大きくなっ



て、元の池に返せるのは、一割にも満たない。左写真は、バ



ケツの中のヤゴ

2017年06月26日

梅雨明け 自然の中に真夏の到来を感じる

梅雨明けした。梅雨の後半が大雨続きだったから、真夏の到来が嬉しく印象的だ。沖縄の季節では、この時期が一番好きだ。沖縄の自然の魅力が、この時期に一番発揮する。私の身体も心も、すっきりと明るくなる。真夏的话题を綴ろう。

音



テレビで自然番組を見ている時、鳥の声が聞こえてくる。テレビからの声か、我が家の外からの声か、わからなくなることがしばしばだ。昼間は常時、どこかから聞こえる。

にぎやかなのは、スーサー（イソヒヨドリ） タイワンシログシラ。気分を悪くするのはカラス。ちかごろ、カラスが屋上アンテナにとまって、あたりを見回すことが多い。ここは、スーサーと鳩の定席だったのだが。

カラスに追われ気味だったコウモリも戻ってきている。

今年は、セミがしおらしく感じる。5月に鳴き始めたが、それ以後も、時々にししか聞こえない。いつもだと、うるさくて、勘弁してくれ、と思う程だが。

夕刻以降は、虫の声も聞こえる。

風が強い時は、風の音そのものと木々がこすれあう音、そして海鳴りも聞こえる。

人工音は、畑作業の音。時々航空機の音。集落放送設備のスピーカーの音

色

海の色が鮮やかになるのもこの時期だ。一枚目写真は、我が家ベランダから海岸を見る。

空の色も青と雲の白とのコントラストが鮮やかになる。2枚目写真は、入道雲の赤ちゃん。

植物の緑が、一層濃くなる。雨のなかでは思うようにいかなかった光合成を思いきりできるぞ、と叫んでいるようだ。

水分過剰で伸びすぎた枝葉が、強い日差しを浴びると、しばしたじろぐ感じになるが。

3枚目写真は、3階ベランダから写した庭畑。

そんななか収穫真っ最中のパッションフルーツの紫色と黄色が鮮やかだ。皮に皺が見られると、食べごろが近づくサイン



2017年07月01日

パッションフルーツ豊作 ぎぼうし デ

イフェンバキア こうもり いそひよど

りの巣

]1) パッションフルーツ豊作 賞味

6月中旬に始まった収穫作業も、いよいよ大詰め。どうやら100個を超す豊作だ。現在4つの苗で育てているが、そのうち一本の紫色が大収穫。もう一本は黄色で、少ない。他の2本は、まだ実をつけられるほどになっていない。

27日から食べ始める。表面に皺がでてくると、食べごろのサインだ。酸味と甘味が混じっておいしい。店では、一個80円ほどだ。



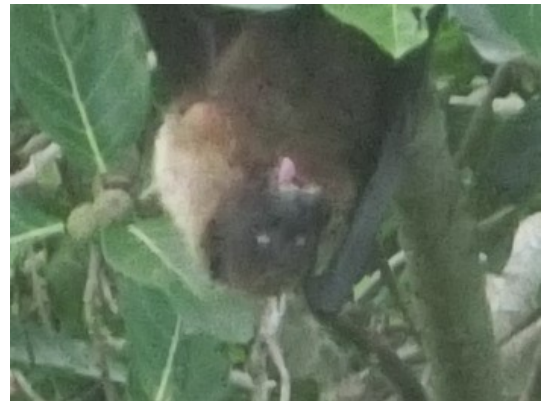
2) 今春、初めて植えたギボウシが一輪だけ開花。どんどん広がることを期待している。

3) ディフェンバキアが開花した。中庭のソテツが日照不足のため、ダメになったので、そこに移植する作業もした。

4) こうもり



カラスとの熾烈な戦い。どうやら、カラスとは時間分けをして、共存しているようだ。昼間飛び交っているカラスは夕



方までどこかに消える。夕方以降、我が家周辺には数組のコウモリ一家がいるようだ。こうもりが飛んでいるのを撮影するのは至難の業。木にぶらさがって、留まっているのは撮影ができる。下写真は、木の実を食べているコウモリ

5) イソヒヨドリ (スーサー) の巣

数日前、建物の西通路のクロトンに鳥の巣を見つけた。メジロかなと思った。28日、通りかかると、イソヒヨドリが飛び立つ。見ると卵が三個。こんなに人間が通る所で、とろうとすれば、簡単にとれるところに巣をつくるなんて、とってしまう。去年は、クルチに巣を作った。去年も人間に近くて驚いたが、今年は





それ以上だ。だから、写真も、なんの苦勞も無しに撮影できる。ちなみに、地上高1メートル



ちょっと。ズームアップもしていない。



2017年07月28日

ナガサキアゲハ

この季節、アゲハ蝶が盛んに飛ぶ。数が少なくて目立つのは、ナガサキアゲハ。我が家玄関前のハイビスカスで吸蜜している。

2017年08月04日

トンボのオスメスと産卵

庭に、二つの池を作り、メダカを飼っているが、蛙が産卵しオタマジャクシでいっぱいになったり、このごろでは、トンボも産卵する。

トンボの卵はヤゴになり、メダカの卵や幼魚を食べる。そのため、メダカはふえない。池に網をかけるといいらしいが、まだその作戦ははじめていない。メダカの数が多いからだ。でもいずれ、そんな作戦が必要になりそうだ。

おかげで、我が庭には、トンボが常時いるようになった。写真は2組のトンボと、下のメスが産卵中の一組



異常な暑さだ。平年より3度ほど高い。これまでの沖縄生活では、ダントツの暑さだ。台風の動きも、これまでとは随分違う感じがする。地球温暖化が、具体的に表れてきた感じがする。

2017年10月10日

ツミ？

我が家あたりに住む猛禽類は、名前がわからずずっときた。近くの人がハヤブサと呼んでいたの
で、そうかなと思っていた。

最近、新聞で「ツミ」が都市近郊にも表れている報道があった。これかもしれない、と思って、沖
縄野鳥研究会編著「改訂版 沖縄の野鳥」新星出版2010年で調べる。そうである可能性が高い。他
に、似たものとしては、サシバがあるが、旅鳥及び冬鳥と書いてあるので、常時いるわけではない。



私が見るものは、一年中いるものだ。そしてツミの鳴き声は「キィーキキキキとかん高い」と書いてある。私には、「ピーィピピピピ」と聞こえるが、よく聞くと、ピにも聞こえるが、キに聞こえなくもない。

近くの林のテッペンに留まっていたので、早速撮影した。近くの電柱の上に留まることも多い。

最近、このあたりでもカラスが増えて困っているが、カラスとツミ？と争うことも多い。どちらが優勢かどうかは、時によって異

なる。ツミ？が現れると、小鳥類は逃げる。

一羽が鳴くと。遠く離れたところからもう一匹の鳴き声が聞こえる。鋭く高い声なので、よく聞こえる。カップルなのか、親子なのか、よくわからないが。

写真は、同じ鳥を連続して撮影したものが、何枚か紹介しておこう。



2017年10月20日

オオゴマダラの来訪 繁殖への期待

庭にホウライカガミを育てていて、かなり大きくなったが、肝心のオオゴマダラがこない日がかかなり続いた。一昨年までの台風続きで、ホウライカガミも難しい時期が続いたのだろうか、と知人と話していた。

それが先週から一羽が毎日のように現れ始めた。例のとおり、ゆらりゆらりと飛ぶ。そしてホウライカガミにとまって、しばしゆっくりしている。

卵をうみつけないかと見るが、まだ発見できない。

産卵→幼虫→さなぎ→成虫、となれば、我が家では3～4年ぶりだ。おおいに期待している。



2017年11月14日

池のメダカのほとんどが死んでしまった 原因不明

しばらく前の台風の数日後、中庭の小さな池で生活していたメダカ10数匹のうち、一匹を除いて、死んでしまった。

原因がわからない。考えられるものとしては、次のいくつか。

- 1) 仕方なく、池の水などを全部をだしてみると、出てきたのは、アーマン（おかやどかり）の死骸二匹。まだ小さいもの。そのためか、池の表面に油膜が浮いていた。アーマンは、水を求めてか、よく池に来る。そして戻れずに溺れかかり、助けることはよくある。今回は小さいために、沈んでしまったのか。それとも、台風の風で戻れなかったのか。
- 2) 台風で、ミフクラギが折れて、その枝葉が池に入り、毒を散らしたか。
- 3) 台風の風のためか。これまでに例はないので、その可能性は低い。
- 4) 水質悪化のためか。しかし、9月に、年一回している清掃を兼ねての入れ替えをしたが、それから二か月もたっていないから、考えにくい。
- 5) 風邪でもひいたのか。





仕方なく、水も含めて全面入れ替えをして、幼魚・稚魚と、生き残った一匹を池に入れた。大きい方の池の方は、大丈夫だった。

写真は、すいすい泳ぐ幼魚たち。稚魚たちは、写真では見つけにくい。白っぽく浮かんでいるのは、餌。

過去の大量死の経験は、数年前の台風で、メダカを育てていた甕が割れてしまった時だ。

いずれにせよ、二つの池で、合計40～50匹が生活している。さらにバケツで育てている稚魚が20～30匹（小さいので数えられない）。

こんな具合にいろいろなドラマがありつつ、メダカ育てが何年か経過している。毎朝の餌やりを兼ねての観察を楽しんでいる。他に、水槽二つにグッピーを数十匹飼っている。写真でお腹が大きく見えるのは、妊娠中のメス

メダカもグッピーも、希望者には差し上げている。

2017年12月24日

我が家を訪問する鳥たち 寒さのためか動き活発 鳩 いそひよどり めじろ こうもり

つみ

森のなかにあるといえそうな我が家だから、鳥の動きはいつも活発だ。このところの例年のない寒さのためか、今年は早い。例年だと、食料不足になる2月ごろに来訪する鳥が多くなるが、今年は今頃から始まっている。播いた種をほじくりかえしたり、落ち葉をひっくりかえして、虫を探すとこだ。我が家の自然のなかに住んでいる鳥はいなさそうだが、隣接する森や、裏山からいっぱいやってくる。春になれば、我が家の木々に巣を作り繁殖活動をする鳥もいる。

ベランダに出れば、ほぼいつも何かの鳥を見ることができる。野鳥観察センターのような場所なのだ。でも、写真撮影は難しい。飛んでいる時、肉眼ではきちんと確認できても、撮影となると至難の業なのだ。

では、頻繁に見かけるものを紹介しよう。

鳩 我が家ベランダから20メートル足らずの樹木をねじろにしているカップル。我が家を自分の縄

張りにして生活する。ベランダのプランターをほっつき歩く中心「人物」 先日も、植えたばかりのカモミールが見事にやられた。ベランダの水がはいったバケツや、庭の池で水を飲む。春になると、ベランダの手すりの上で、交尾までする。夏には、3羽以上になるから家族で行動するのだろう。

小鳥向けに餌付けしようとした餌は、この鳩たちが食べる。

スーサー（いそひよどり）（写真） いつも数羽がいる。おそらく家族なのだろう。写真のように、我が家の高いところで、お互いを呼び合っている。鳩より小さいので、鳩がくると「遠慮」するが、私たちに一番近い鳥。時々、家のなかまで入り込むことがある。今春は、敷地内で、私の手が届く所に巣を作った。洗濯物干し場に巣を作ったこともある。

めじろ 今ごろになると、毎日やってくる。10羽ぐらいの群れだ。「目白押し」そのものだ。木の実などをあさる。以前、敷地内の樹木に巣作りをして、温めているところを撮影したことがある。美しい鳥だし、鳴き声に人気が集まる。



こうもり 朝夕に隣の森と近くの森との間を行き来しているのを、毎日のように見かける。不思議と、我が敷地内の樹木にはとまらない。巨大なので、始めて見る人は驚く。

つみ 長くハヤブサだと思っていたが、どうやらツミのようだ。電柱など高いところのてっぺんにとまって、あたりを見回している。カラスと喧嘩しているところを見たことがある。このあたりに住んでいるようで、10年余り見続けている。鋭い鳴き声だ。

以上は、毎日出会うといってもよい鳥だ。

からす 長く見かけなかったが、最近現れるようになった。私は、どうしても好きになれない。

たいわんしろがしら 頭が白いのが特徴的だ。冬場に時々現れる。収穫間近の野菜を先に食べてしまうことがよくある。

以前はいたが、最近見かけないのは、スズメ。不思議だ。空高く飛ぶ渡り鳥も、季節によって見かける。ツバメも渡りの途中でみかける。海鳥のアオサギが、時々、我が家近くまでくることもある。

2018年06月06日

メダカを飼っている池に現れる動物 今度は大きな蟹

我が庭には二つの池がある。私がセットした人工池だが。

それでも、自然のなかの我が家なので、いろいろな動物が現れたり棲みついたりする。まずカエル。かれらの主目的は産卵。何種類のカエルが産卵したかはよくわからない。「いろいろな卵があるものだ」と感心した。すぐにオタマジャクシになり、カエルになり、飛びだしていく。

そしてトンボ。トンボはペアでくっついたままで池の周りを飛び回り、池のなかの水草に産卵する。

メダカを飼うのが主目的なのだが、いろいろなものが共棲している感じだ。共棲しているというと、聞こえはいいが、生存競争している。とくにヤゴがメダカを食べるのは困るほどだ。メダカの増えすぎを制御しているといえば、聞こえはいいが。

鳥が水のみに来ることも多い。鳩やスーサー（イソヒヨドリ）だ。先日は、水浴びをしているスーサーを目撃した。

アーマン（オカヤドカリ）もくる。入って出られなくなるのが多く、私が救出することが結構ある。溺れ死んだネズミをみつけたこともある。

今度は、カニだ。メダカが卵を産み付けたホテイアオイを取り出す作業をしていた時、池底の石が動く。変だなと思ってみていると、カニを発見。10センチ



近くある大型のものだ。前から棲みついていたのか、最近入り込んだのかはわからない。池はプラスチック製なので、入り込んで出られなくなる動物が結構いる。

今回は、外に出して記念撮影。知らぬ間にどこかに消えた。産卵で海岸まで行くカニやアーマンが多くなる季節だから、その旅の途中に立ち寄ったのかな、とも思う。

2018年06月29日

グッピー大繁殖 もらい手探し中

久しぶりにメダカ・グッピーの話題

昨年あたりから順調に育ち始めた。というよりは、過剰に育っている。メダカやグッピーだと思って育てていたものがカダヤシ（タップミノー）だった数年前に比べると、付き合い方がずっとうまくなった。双方ともに、繁殖が進んでいる。



メダカの方は、屋外の二つの池で育てているので、他の生き物、とくにヤゴとの激しい生存競争のなかにある。それでも生き続けている。卵を産み付けたホテイアオイをバケツに入れて、2～3か月かけて幼魚まで育てて、池に戻しているので、生育数は総計60～70匹ぐらいで安定状態。

グッピーの方は、屋内水槽二つで育てているが、生存競争相手がいないので、生まれた赤ちゃんはほとんどが成魚になる。ご希望の方に差し上げている。合計数か所にさしあげた。とある小学

校低学年3クラスにさしあげた合計40匹ぐらいが一番多い。去年はそれで、総量的には、バランスが取れていた。

しかし、今年はずでに幼魚だけで70匹を超えている。成魚も50匹ぐらい。水槽の容量としては、成魚70匹ぐらいが限度だろう。それに近づいているので、今バケツに、30匹ぐらいの幼魚を移した。

ご希望の方を待っている。ご連絡ください。

2018年07月05日

台風と大雨続き

台風7号。突然のようにあらわれて、すぐに去っていくような感じがしていたが、そうでもない。

1) 通常みている天気予報サイトやテレビなどの予報では、2日前からやっと登場してきた。ところが、私が時々見るヨーロッパ中期予報センター(ECMWF) <https://www.windy.com/> では、それ以前から沖縄襲来を予報していた。これは、ヨーロッパの機関だが、世界中の予報をだしており、かなり信頼度の高いものを出しているように感じる。

2) 予報速度とは異なって、さっと去っていく台風とはならず、しかも土日訪問ではなく、日月訪問にかわった。台風の後には、返し風、そして晴れ、というのが定番だが、今回は様子が異なり、大雨が続く。

おかげで、水不足は解消だが、過剰になりそうだ。我が家のあるところは、有名な垣花樋川などと同様に、地下水が湧き出やすいところだ。我が敷地内からも、地下から水が湧き出ている。写真参照

3) 風は、糸数の観測装置あたりでは40数メートルを観測し、ニュース報道もされたが、観測地点は糸数城址隣の高台にあり、それと比べると、我が家がある中山は、10～20メートル以下の風

速だろう。庭畑の木々では、風当たりが強いベランダの千年木の枝が二本折れただけだ。

実をつけて収穫間近のバナナは倒れなかった。

4) しかし、隣の森から大量の枝葉が飛んでくる。その整理を始める。落ちた枝葉を木の根元に移動したり、箱に入れたりする。箱に入れて乾燥させてから、コンポストに入れて堆肥化する。

5) 大雨続きで、その整理作業ができない。雨の合間にするが、ほとんどが持ち越した。

家の中に閉じ込められると、気持ちが滅入るので、傘をさして海岸散歩に出かける。



2018年07月19日

オオゴマダラがつがいであらわれる

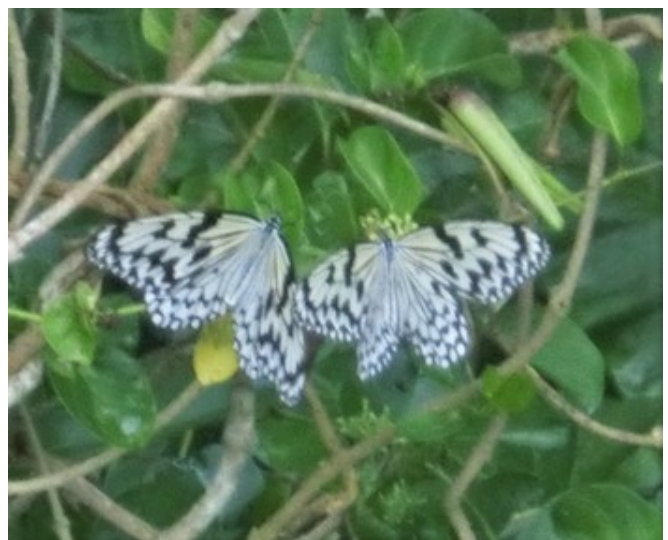
我が家の庭に、オオゴマダラの食草ホウライカガミを育て始めてから10年近くなる。大きく育て、クロキをおおってしまっている。3階ベランダから観察しやすい位置にある。直線距離では10メートル近い。

このところ、毎朝オオゴマダラを飛んでくる。写真に

収めようとするが、なかなか難しい。

ところが、19日朝は、長い滞在で写真に収められた。すると、もう一羽あらわれる。そして、二羽が絡み合い始めた。とにかく夢中でシャッターを押す。100枚ほど撮影。

ここで、産卵するのは何回目だろうか。今年も幼虫まで育ったのを一度見たが、孵らなかった。数年前、金色色の蛹を産み付けたことがある。今回も期待がふくらむ。





2018年09月08日

オオジョロウグモ メスとオス

わが庭畑のあちこちにオオジョロウグモのクモの巣が作られ、来客は驚く。多くの方はこわごわ近づいて見るか、近づこうともしない。

5月ごろに巣を作り始める。10月ごろまで出会う。庭畑を歩いていて、気づかずにひっかけてしまうこともしばしばだ。今年は庭畑の剪定をかなり強めているためか、クモの巣の数が少ない。

写真は、駐車場の端っこにつくられた巣。巣の大きさはタテヨコいずれも1～2メートルと大きい。蜘蛛は15センチほど。ただしメスの話。オスは、メスの周りにたくさんいる。数えてみると、このメスは25匹のオスを従えている。オスの大きさは数ミリ程度。小さいので、カメラの自動焦点では、上手くない時が多い。オスは交尾した後にメスに食べられる危険がある。

2018年10月07日

台風 長期停電 インターネット長期切断

29日の24号、4日の25号と続く台風襲来には、散々な目にあった。並べよう。

24号の南城市観測で56メートルが、全国放送で流れたらしく、「有名」になったかな。24号は40メートルほど。40メートルを越すと、樹木の幹が折れる。

1) 停電が、丸三日間プラス12時間。

コンピュータが使えない。こんな経験は旅に出た以外にはない。仕方がないので、夜はろうそくの明かりでの読書 昼間は庭畑の後片付け

2) 停電が終わったと思ってコンピュータ作業をして、待たせたところへメールで送ろうとしたら、インターネット不具合に気づく。調べてもらったら、電話回線の不具合。光回線でインターネットにもつながっているので、あわせて切断。

長時間のインターネット不通状態。メール不着で迷惑をかけた方が多い。

インターネット上のカレンダーでスケジュール管理をしているので、日程管理でも失敗が出ていそうだ。

3) 半端ではない後片づけ

24号の風は、東風→南→西→北と一回転した。25号は北東→南西だった。我が家は森に囲まれてい

るので、枝葉が大量に舞い込む。バケツ100杯を越すと推理。

庭畑の木々も折れる。幹から折れるものも多い。

ティートリー 3～4本 (写真)

チシャノキ 3～4本

キバナタイワンレンギョウ

木ではないが

バナナ3本

柱サボテン 数本

他にいろいろと

そんななか、なぜかうりズン豆だけは、大豊作片付け完了は、10月中頃になりそうだ。



4) 近隣の畑など

サトウキビの倒伏

海岸畑への海水侵入 高潮・高波によるもの
防風林は、スケスケ状態。

5) 停電の余波 シャワーの温水が出ない、などなど

テレビ不通 「みみもとくん」のラジオ機能で情報を得る

6) アリ 蚊

家の周りの食糧事情が急に悪化したためか、アリが大量に屋内に入ってくる。

逆に、庭畑の蚊が、暴風のためか、全く消えてしまった。数日後から、わずかだが現れ始めた。

2018年11月08日

池でグッピーを育てる

庭畑の植物も新葉が出て、4月のウリズンのころの感じになっている。

話しは変わるが、水槽のグッピーもどんどん殖えて、いまや100匹を超える勢いだ。大小二つの水槽では、息苦しくなっている。このところ、引き取る人もあらわれない。バケツにも一部を移した。そこ





でも 10 匹余りの出産があった。

そこで、大胆な作戦を考えた。庭の池にはメダカが棲んでいるが、そのプラスチック製の池の周りにも、このところの大雨で水がいっぱいたまっている。思いついたのは、プラスチック製の池を移動して、その跡を池として活用することだ。まさに自然に近い池だ。

メダカがいるプラスチック製の池を移動した後で、水を入れてみた。一晩すると、ほぼ抜けるが、水道水をポタポタ程度入れると、水位を維持

できることが分かった。まずは 5 匹ほど、グッピーを入れてみた。入れる水の量の調整に失敗して、わずかな水位になった時も、生き延びた。「これはいける」と判断する。

先日の大雨の時は、水があふれだしたが、大半のグッピーが生き延びている。そして、大雨後の数日間は、常に新たに水が流れ込んでくる。ということで、晴れ続きの時に、チョロチョロ程度の水の補充をすればやっていけそうだ。

こうして、さらにグッピー数を増やして飼い始めた。まだ油断はできないが。ビオトープ状況に近いので、他に、トンボ・カエルなどの小動物もやってくるが、グッピーは、メダカ以上に強そうだ。

池にはメダカを育てていた際にあったホテイアオイがいくつか残っているが、そこに産み付けられていたメダカの卵が孵って赤ちゃん数匹が泳いでいる。大きくなるのかな。大きくなったらどうなるのだろうか。

写真に写っているバケツは、隠れ場向けだ

2019 年 03 月 04 日

オオゴマダラの幼虫 季節は変わる



今年はとにかく温度が高い。いろいろな花が咲き始め、蝶が舞う。蝶はリュウキュウアサギマダラ、ツマベニチョウ、リュウキュウミスジ、シロオビアゲハなどと、勢ぞろい。

そのなかでも、目立つのはオオゴマダラ。毎日のように飛来する。先日は二羽がかわるがわる来る。朝ホウライカガミを見ると、幼虫が10匹ぐらい食事中。日が昇ると、葉裏に隠れる。もうしばらくすると、金色のサナギが見えることを期待する。

オオゴマダラは、人間をほとんど気にせずに、私との距離10センチぐらいのところを飛ぶ。下の写真は、ズームアップしないで撮影したもの



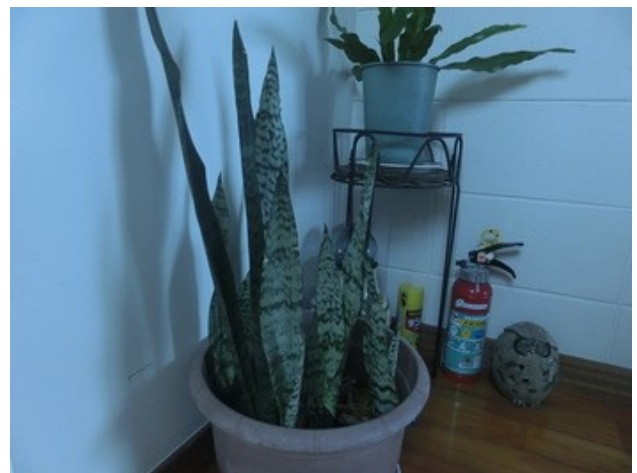
2019年07月18日

台風の高波 サンセベリア（トラノオラン）を室内に置く

台風の高波が激しい。中心気圧は低いし、遠くにあるのに、高波はすごい。雨も大量だ。前ページ写真は、我が家ベランダから写したものの。



わが庭畑はサンセベリア（トラノオラン）で溢れている。とても育てやすいし、どんどん殖えるからだ。そして、健康によいことをよく耳にする。そこで、室内でも育てることにした。根というか、地下茎というか、それを掘り出して、鉢



に埋めるだけだ。

1～2か月もすれば、新芽がによきによきと出てくる。1年もすれば、新しいものでいっぱいになる。管理は簡単。土の表面が乾いたら、水をかけるだけ。日陰でも十分育つ。

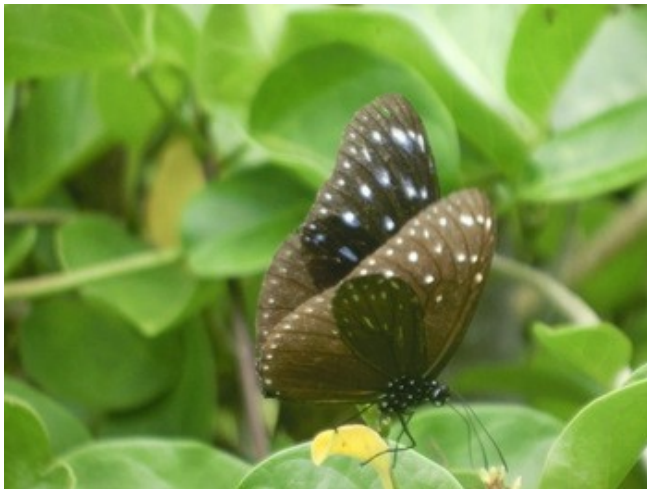
最後の写真は、庭で一斉開花した時（先週）の写真。

2019年09月02日

ツマムラサキマダラ 蝶が飛び交う庭畑

このごろのわが庭畑は、蝶々園のようになっている。とくに、オオゴマダラが何匹も群れるといえるほどのハウライカガミ周辺がそうだ。

名前がよくわからない小型種を除いて、常時見かける種の名前を並べてみよう



オオゴマダラ リュウキュウアサギマダラ
ナガサキアゲハ ツマベニチョウ シロオビア
ゲハ アオスジアゲハ カバマダラ リュ
ウキュウミスジ

一種だけ、名前が判明しないものがあったが、図鑑でようやく探し当てた。

ツマムラサキマダラ

紫色に輝く羽が印象的だ。

2020年05月04日

ウラナミシジミの交尾

毎年4月下旬には見事に大量開花するティートリーが、全く咲かない。冬の少雨のためか、4月の寒さのためか、原因不明。毎日見て回るが、だめだ。

そんな時、ソテツの新葉で、ウラナミシジミの交尾を見る。そこに、ほかのウラナミシジミをきて「ちょっかい」を出す。

図鑑には似た種がいくつも書かれているが、素人の私には区分しにくい。この仲間は、いつもわが庭畑を飛び回っているが、交



尾は初めて気づいた。
可愛くて綺麗な蝶だ。

2020年07月23日

オオジョロウグモ オスとメス

わが庭畑には、日本最大の蝶、オオゴマダラだけでなく、日本最大の蜘蛛、オオジョロウグモも生活している。5月ころから見かけ、10月頃までである。庭畑のあちこちに巣を張る。7月下旬の現在、数十の巣がある。だから、私たちが歩けば巣にひっかかる。巣も大きくて、1～3メートルぐらいだろう。



見るからに怖そうな体つき・色をしているので、虫嫌いの人には、夏の庭畑散策は大変だ。

メスが大きくて、5月末に2～3センチだったものが、10月には15～20センチぐらいになる。対照的にオスは小さくて、せいぜい1～2センチほどで、赤味がかっている。メスが張った巣に、数匹、多いものでは20匹ぐらい、メスとは距離をとって、棲みつく。

交尾し終えた後、メスがオスを食べるというから、オスは必死そのものだ。オスは小さすぎて写真にとりにくいのだが、今回とれたので、この連載に登場したというわけだ。写真の中に何匹居るか、よく見て確かめてほしい。

オオジョロウグモが巣にひっかかった鳥を食べたという話に出会ったことがある。大きいから、ありそうな話だ。ある時、地面すれすれに巣を張ったものとカマキリとが鉢合わせになった。どちらが勝つかと興味津々だったが、その時はカマキリが勝利した。その記事は、2013年8月24日に掲載した。アクセス数多くて、いまでも、本ブログアクセス数ベストテンに入っている。<https://makoto2.ti-da.net/e5230269.html>

2020年08月10日

西之島火山による煙霧 (PM2.5) !



5日、晴れているのに曇っている感じで、遠くが見えない。ヤンバルの本部では、近くに見えるはずの伊江島が見えなかったという。いつもチェックしているPM2.5予報ではゼロなのにもかかわらず、である。今年は、大陸からのPM2.5の飛来の少なさは、経験したことがないほどである。工場や自動車の排出物が激減したためという。その日は、不思議なままで終わった。

そのうち、私の喉と眼が反応し始める。眼がかゆくなり、喉も異物を感じる。翌日には、喉鼻から微量の排出物が出てくる。これは、PM2.5が多い時にしか出ない反応で、この一年間、ほぼなかったことである。

7日になって、新聞記事で情報を発見。沖縄からはるか東にある西之島の火山が、大量の火山灰をまきちらし、それが、風に乗って、沖縄まで飛来して引き起した「煙霧」だという。風向きが変わった6日以降は、出ていない。

火山灰と言うと、6, 7年前、鹿児島に滞在した時に桜島の火山灰にやられて、辛い体験をしたことを思い出す。

これまで大陸からの、時には日本本土からのPM2.5ばかり気にしていたが、東の西之島も気にしなくてはならないから、大変だ。

呼吸器疾患を持つ人は、PM2.5だけでなく、今年はコロナに特に気をつけなくてはならない。私も該当者だ。このところ、私の近辺でも、南城市役所が消毒のため一時閉鎖するなど、コロナの影響を身近に感じるようになってきている。

どうなることやら。

2020年09月01日

台風 これから片付けが大変だ

1時ごろ、ようやく停電が終わり、今パソコンに向かっている。スマホを使わない私は、停電するとインターネットは、アウトだ。

今度の台風は、早く通過すると思っていたが、意外と長引く。沖縄から遠ざかっているが、強くなっているためのようだ。長い時間の風雨のため、結構枝葉が落ちているようだ。停電時間が長かったので、やりたい作業が遅れた。しかたがないので、読書で時間を過ごした。

大きな音が嫌いな我が猫たちは、室内でじっとしているが、ベランダにある猫用トイレには、風雨の中走って用をたしていた。

来襲前に家周りのかたづけを終えておいた。写真のように、実ったバンシルー（グアバ）も収穫した。





まだ、風雨が強いので、被害状況はわからないが、見たところ、ベランダの千年木3本が折れた。ドラゴンが折れて、



屋上からベランダに落ちてきた。そのぐらいかな。

予報をみると、今週末に次の大きな台風がきて、西日本を直撃しそうだ。

写真は、千年木、バンシルー、大波

2020年09月04日

台風の変化

9号、10号と台風が発生し、これまでの記憶にはない台風の姿・進み方をしている。海水温が高いことと、本州周辺を広くおおう強い高気圧の存在が影響しているようだ。発生・成長の地域が北方へと移動し、以前なら沖縄付近を過ぎると勢力を弱め始め、方向も東向きにかわっていくのだが、今年はずう。台風関連情報の中でよく話題になる偏西風は、今年はどうなっているのだろうか。

9号では、海岸の砂が、川の出口をふさいでしまった。南風の時には、時々あることだ。風のためか高潮の為かは、素人には、よくわからない。

このあとも、いくつも発生がありそうだが、これまでの見方では通用しない点が多い。そして、難題の焦点が、沖縄付近から九州や本州へと移っているような印象さえする。と同時に、焦点が移動して安定するというよりは、変化が恒常化するという特徴があるようだ。

従来言われてきた対処策が通用せず、新しい予報とか対処策が言われているが、その通用期間は長くなさそうだ。「〇十年に一回しかないほどの」という言い方がなされるが、それがこうも頻繁にいわれるとなると、この次は、どういう表現になるのだろうか。

森に囲まれた我が家は、森で風が弱められて助かっているが、逆に枝葉が大量に落ちてくるのが難題だ。9号の片付けの最中だが、10号でまた落ちて来るかもしれないと思うと、片付けをどうするか迷ってしまう。意外なことは、9号では潮風被害が少ないことだ。南風も吹いたが、それほどでもなかったということだろうか。

10号は北風が中心になりそうだが、9号で落ちてしまっただけに、少なくなるというのだが。

これまでの対処策も変化させる必要があるのかもしれない。私たちも、対処や後片付けに、体力上の問題が生まれ始めてきている。

2021年08月19日

楽しいドラマのような雲

とどまることを知らないかのようなコロナ禍。ついにロックダウン可能性の言葉さえ出てきた。私の外出も、買い物・卓球練習・医者通いと単純になっている。ほとんどが、自宅での読書と執筆、その間に庭畑作業とウォーキングと、単調だ。それらの合間に空を見る回数が多い。

昼は雲の姿に心躍る。写真は、先日の空。楽しいドラマのような雲。天の真ん中には、うっすらだが虹色の輝きが見える。



夜は星空を眺める。今はさそり座の季節。だが、朝方には、もうオリオン座が現れる。



2021年09月21日

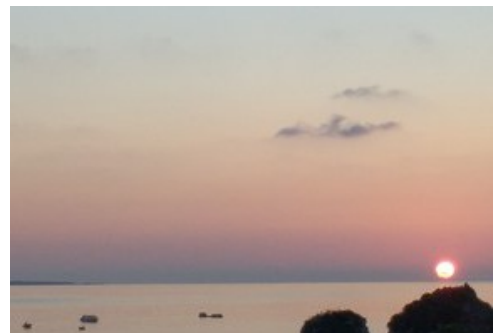
早朝 月は西に 日は東に

今朝、ベランダから西に沈む満月を見る。

散策で新原で、昇る太陽と久高島を見る。水平線右に日の出、左に久高島



月は西につなぐ空の橋
東に日





2021年10月21日

小笠原の海底火山からの軽石が中山・玉城海岸に漂着

今朝のいつもの海岸散策の折、中山・玉城海岸の数百メートルにわたって、軽石がたくさん漂着しているのを発見。テレビ報道で話題になっているので、関心を持って散策していると、結構たくさんの軽石が見つかる。数ミリ以下の小さい物から、数センチほどの大きいものが無数に見られる。テレビ画面にあるように、漁港の海面を覆うようなものではなく、海岸に漂着しているものがほとんどだ。とても軽く、海岸にあった小さなカップに拾ってきて、水洗いする。グッピー水槽の中に入れて、水をきれいにすることに活用してみようと思う。

とても軽くて灰色だ。距離にして1000～2,000キロほど流れてきたの
だろうか。各地で見つかったので、すごい量だと思う。



2022年05月04日

ジャコウアゲハ

イシガケチョウ

アオタテハモドキ



寒暖の変化が激しいこのごろ。ウリズンから若夏、そして梅雨へと季節が移る。我が庭畑 花の美しさはすごい。なんとサガリバナ（サワフジ）が、5月1日に開花。いつもは5月末から6月初めなのだが。

今回の主人公は蝶。わが庭には、晴れた日、いつも数種20～30羽の蝶が舞っている。その中で、私の眼を特に引き付けたのは、次の三つ。



ジャコウアゲハ 黒い蝶はよく見かけるが、いくつもの種類があって、同定できなかったが、今回同定したのはこれ。輝きがいい。

イシガケチョウ 何年かぶりに登場。不思議な形と色をしている。紫色の花はタイワンレンギョウ

アオタテハモドキ これは、近くの畑で発見。私も初見で、珍しいものだから掲載。図鑑によると、最初は迷蝶だったが、すっ

かり定着したとのこと。

2022年06月09日

ハブ取り網にアカマタがかかる 2回目

先日、わが庭の森に近い所に設置したハブ取り網にヘビがかかる。まだかかったばかりで、恐る恐る近づいて観察。

どうやらアカマタのようだ。アカマタは、おとなしいハブに比べると、はるかに獰猛で、模様も恐ろしい。網にかかるのと激しく動くので、かえって網にからまりやすい。昨年も一尾かかったので、これで二尾ということになる。数か月前、庭の堆肥の枯れ葉の間に見つけたものだろうか。

数日たつと、形が崩れたが、半月もすると、骨しか残らないだろう。

アカマタは、ハブも食べるし、神様として大切にされてきた。おかげで、ハブをわが庭で、ここ数年見かけない。我が猫が、森の中でハブに噛まれて大騒動したが、我が敷地内ではみかけない。ハブ取り網を設置した数年前には、設置直後に3匹もかかったが、以後みかけない。



我が家近辺は、ハブが多い所だが、とくに我が家は森に囲まれているので、多そう。以前、ハブセンター職員が、中山区長に、集落でハブの多い所を尋ね、我が家だということになって、ハブ取り網設置したという経緯がある。

犬より猫の方がハブに強いという話を色々聞いて、野良猫をてなづけようとしたが、うまくいかなかった。3年前から猫を飼っているが、ついに昨年、猫がハブにかまれた。しかし、無事にサバイバルして、いまは噛まれた痕も残っていない。

我が家のハブ・アカマタ物語でした。

2022年06月17日

フタオチョウ？

先日、鉢植えのプルメリアの幹にとまって、じっとしている初めて見る蝶がいた。おそらく羽化したばかりで、羽を乾かしているのだろう。

図鑑で調べるが、該当するのがなかなか見つからない。ついにそっくりの写真を発見。フタオチョウとある。インターネットでいろいろと調べるが、本島中北部に生息とある。2年前の新聞記事によ



ると、専門家によって、首里で発見され生息地南限とある。そして、沖縄県の天然記念物に指定されており、絶滅危惧種とされている。

もし、写真が本当にフタオチョウなら、南限記録を越えている。撮影後は、再び見ていない。それにしても、わが庭は、見たことのない動植物が結構いそうところだ。

詳しい方のご意見を聞けたら幸せだ。

2022年06月27日

豪雨と梅

雨明け

ウミガメとハブの受難

今年の梅雨の雨量はすごくて、平年の2倍をはるかに超えたようだ。梅雨が明けると、例年通り、強い太陽が照り付ける。こんな中の話題。

豪雨は、産卵に海辺に戻るウミガメたちに災難をもたらした。玉城・中山海岸は、数は少ないが、ウミガメの産卵地だ。ところが、豪雨続きで、息絶えたウミガメが横たわっていた。

河口付近には、ハブが横たわっている。豪雨で川に流され、水を大量に飲んで膨れ上がり、河口まで流されたようだ。いずれも、記録的豪雨の翌日の6月17日の撮影。



我が庭畑も、表土が流され、あちこちに水流ができた。水流は梅雨明け後一週間で、やっと収まった。植物も、根こそぎやられるとか、根腐れしたものなど、かなりやられた。

こんななか、もぐらが必死に生き延びて、あちこちに通路の出口になる穴をつくっている。



2022年07月27日

オオゴマダラの交尾

わが庭の昼間は常時日本最大の蝶オオゴマダラ数匹が飛び交っている。朝の庭散策中に交尾しているのを発見。写真撮影は、数年前に次いで2回目。

しばらくして、卵をホウライカガミの葉裏に産み付けるはず。探すのが難しい。過去に一度だけ成功。しばらくして、幼虫が動き出す。さらにしばらくして金色のサナギがあちこちにぶら下がる。

撮影翌日も、交尾を発見。今年は、「当たり年」か。



2022年09月07日

台風

今回の台風11号は本格的なもので、警戒を強めるようニュースは繰り返し語っていた。実際は、「往復台風」なので期間が長かったが、一度も暴風雨圏内には入らなかった。風はせいぜい25mほどだった。雨の方は、「期待通り」降ってくれて、植物たちは喜んでいし、あふれるほどの量ではなかった。

我が庭畑の被害一覧（家屋への被害はゼロ）

1. すでに15度ほど傾いていたレモンユーカリが、70度ほど傾いたので、幹の高さ2mぐらいのところで、切断。
2. 100本以上ある千年木のうち、十数本が折れる。
3. 大雲閣一本が、15度ぐらい傾く。
4. 小枝や葉はたくさん飛ばされるが、被害といえるほどではない。

大量の枝葉が、隣の森から飛ばされてきたものを含めて、たくさんあるのは、いつもの通り。この後、潮風にやられた葉が痛み落ちることが、台風後数日で起きるだろう。「潮風を散水で落とせ」というが、やるとすれば、3時間ぐらいかけて、3000円ぐらいの水道料金がかかることになるので、今回もしない。

猫たちが、雨で外出できずに退屈極まりなし。

これから数日は、落ち葉などの清掃に励む予定だ。写真は、傾いたレモンユーカリ

